

SHIBAKAWA Toshiyuki



PLANET HIRUZEN MUSEUM
Hiruzen Museum of the 41st Century

柴川敏之展 — 41世紀の蒜山博物館



柴川敏之展 | 41世紀の蒜山博物館

SHIBAKAWA Toshiyuki : Hiruzen Museum of the 41st Century

柴川敏之展 | 41世紀の蒜山博物館

- 高原のミュージアムを後にすると、そこは21世紀だった。

SHIBAKAWA Toshiyuki : Hiruzen Museum of the 41st Century

- Coming through the Highland Museum of the 41st Century, we found ourselves in the 21st Century.

2022年3月19日(土) - 7月3日(日)

19th Mar. - 3rd Jul., 2022

真庭市蒜山ミュージアム

Maniwa City Hiruzen Museum

主催：真庭市

後援：真庭市教育委員会、山陽新聞社、読売新聞岡山支局、朝日新聞岡山総局、毎日新聞岡山支局、産経新聞社、RSK山陽放送、OHK岡山放送、TSCテレビせとうち、RNC西日本放送、KSB瀬戸内海放送、真庭いきいきテレビ、FM岡山、エフエムつやま

[関連企画]

アート&考古のコラボ企画

柴川敏之展 | 41世紀の古墳ミュージアム

-「過去」と「未来」を往復する。

Collaboration Project of Art and Archaeology

SHIBAKAWA Toshiyuki : Ancient Tomb Museum of the 41st Century

- Going back and forth between "the Past" and "the Future"

2022年3月19日(土) - 12月4日(日)

19th Mar. - 4th Dec., 2022

真庭市蒜山郷土博物館

The Museum of Hiruzen Area, Maniwa City

主催：真庭市教育委員会





目次

- 06 会場風景 | 41世紀の蒜山博物館（真庭市蒜山ミュージアム）
- 56 会場風景 | 関連企画：41世紀の古墳ミュージアム（真庭市蒜山郷土博物館）
- 66 蒜山に舞い降りた鶴 | 柴川敏之
- 68 「未来」と「過去」の往復 – 柴川敏之さんの作品展に寄せて | 前原茂雄
- 70 柴川敏之展を見て | できなかつた展覧会「柴川敏之×岡本太郎」 | 川延安直
- 72 なぜ柴川敏之なのか | 三井知行
- 82 トピックス
- 84 関連イベント
- 86 展示配置図・作品リスト
- 88 柴川敏之 略歴

樺原のハイランダムを後にすると、もう21世紀だった。

Coming through the Highland Museum of the 41st Century, we found ourselves in the 21st Century



PLANET HIRUZEN MUSEUM

Hiruzen Museum of the 41st Century

柴川敏之展 — 41世紀の蒜山博物館

真庭市蒜山ハイランダム | Maniwa City Hiruzen Museum





2000年後に発掘された蒜山

ようこそ、41世紀の蒜山博物館へ！

蒜山高原は、複数の火山に囲まれ、観光・リゾート地として有名です。一方で、20世紀前半は軍馬の生産が行われたり、「蒜山原陸軍演習場」(1935~45年)が置かれるなど、戦争の影も見えます。

緑に覆われた一見平和に見える蒜山高原も、現代のポンペイとなり得る可能性を秘めているのではないでしょうか。

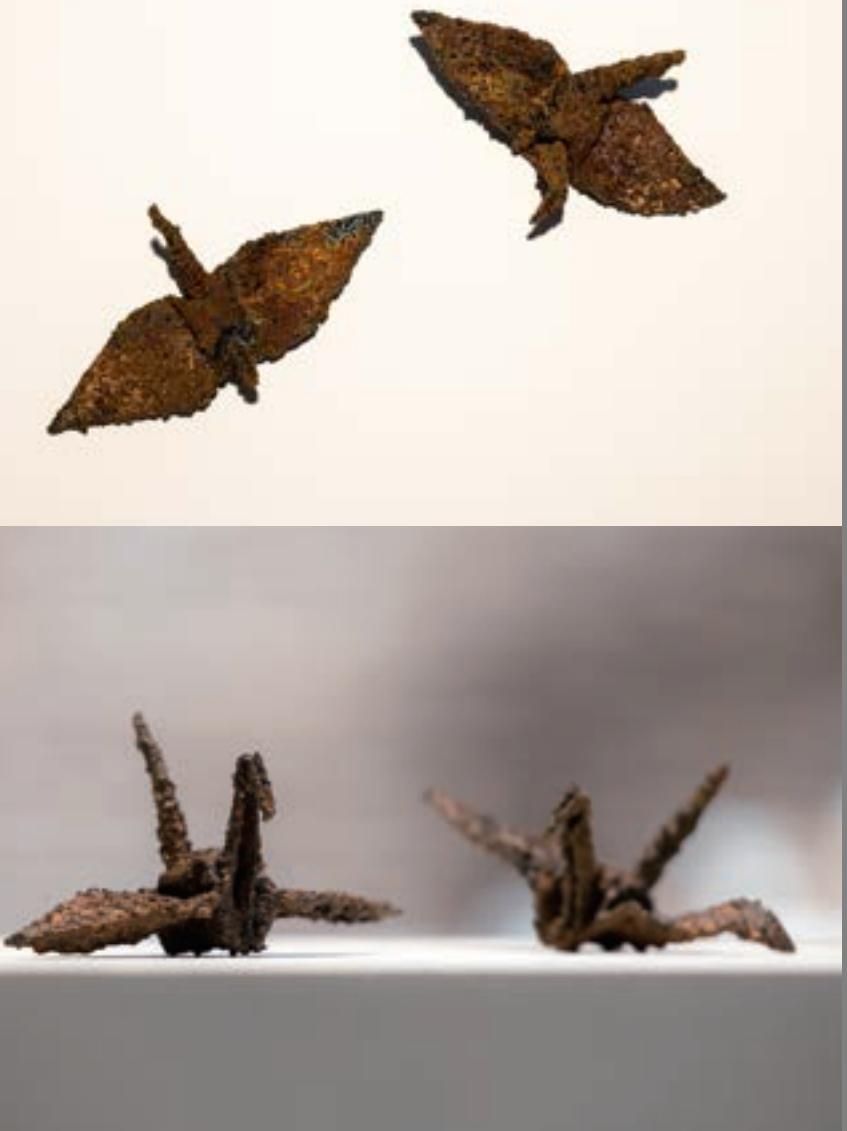
PLANET HIRUZEN Hiruzen Excavated 2000 Years Later

Welcome to The Hiruzen Museum of the 41st Century!

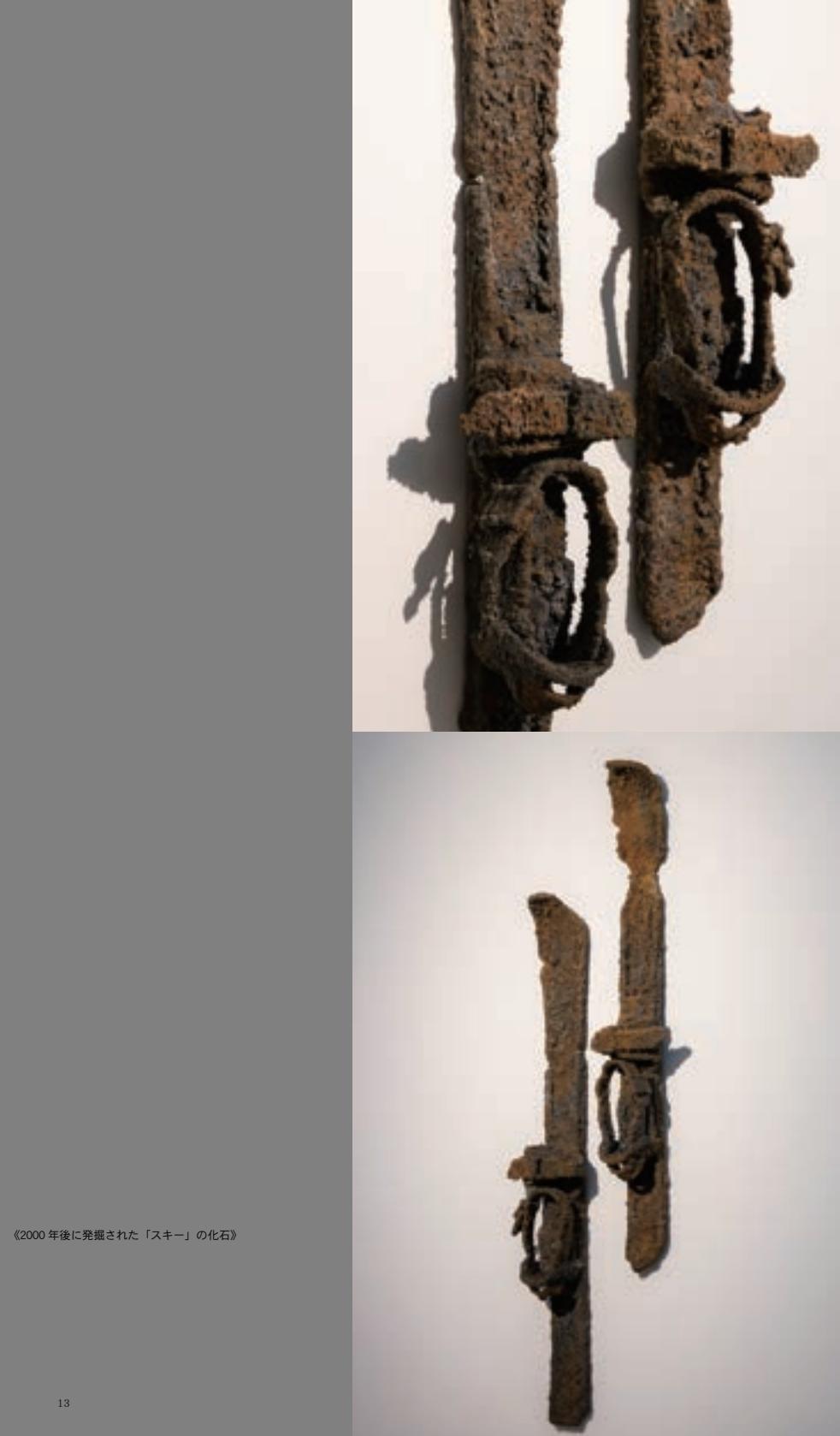
The Hiruzen Plateau, surrounded by multiple volcanoes, is famous as a tourist and resort area.

However, during the first half of the 20th century, we can see the shadow of war, as the production of military horses was carried out there and "Hiruzenbara Army Training Ground" (1935~45) was established.

The seemingly peaceful Hiruzen Plateau, covered with greenery also has the potential to become a modern-day Pompeii.



1 《2000年後に発掘された「折り鶴」の化石》



2 《2000年後に発掘された「スキー」の化石》

3 《砲弾》 真庭市蒜山郷土博物館蔵

戦前、蒜山高原に存在した蒜山原陸軍演習場で使用されたもの。蒜山地域は広大なため、蒜山三座に向かって実弾射撃の訓練が行われた。戦後、幾つか掘り出された不発弾の内、火薬等がなく安全なものである。





4 《2000年後に発掘された「牛と戦車＆コントローラー」の化石》(部分)



4 《2000年後に発掘された「牛と戦車＆コントローラー」の化石》

2000 年後に発掘された蒜山の研究室

41世紀の考古学者は、この部屋で発掘された出土品を分類整理しています。机の上では蒜山周辺の町並みの復元が進んでいます。それはまた、21世紀に活動していた柴川敏之というアーティストの制作場所の復元にもなっているようです。戦車が通っていたらしい大きな道路、遊園地や菱型で構成された建造物が建設されていた様子がわかります。

また、この辺りでは、地域の特産品やよく食べられていたモノも多数出土します。

PLANET LABORATORY

Hiruzen Laboratory Excavated 2000 Years Later

41st century archaeologists sort and organize the artifacts excavated in this room. The reconstruction of the townscape of Hiruzen is progressing on the desk. It also seems to be restoring the production site, where an artist named Toshiyuki Shibakawa was active in the 21st century.

On a large road that seems to have been used for tanks, you can now see an amusement park and buildings constructed in the shape of a rhombus.

A number of local specialties and commonly eaten items also have been excavated around here.

PLANET LABORATORY
2000 年後に発掘された蒜山の研究室





5 《2000年後に発掘された「ソフトクリーム」の化石》

7 《2000年後に発掘された「蒜山焼きそば」の化石》

8 《2000年後に発掘された「牛乳&ヨーグルト」の化石》





蒜山最大の古墳群である四ツ塚古墳群の内、13号墳から出土した資料。いずれも6世紀古墳時代の鉄製馬具である。面懸金具は馬の顔面に懸けた紐に付ける装飾金具、雲珠は紐の交差部分の金具、杏葉は馬の胴に付けた紐に垂らした装飾金具である。

6 《装飾馬具（面懸金具、雲珠、杏葉）》 真庭市蒜山郷土博物館蔵

11 《2000年後に発掘された「メリーゴーランド」の化石》







10 《2000 年後の考古学者の机 2 (高昌の街を復元中)》



9 《2000年後の考古学者の机1
(蒜山の出土品を分類整理中 / 柴川敏之アトリエの机)》



2000年後の発掘現場～キューピーを探せ！

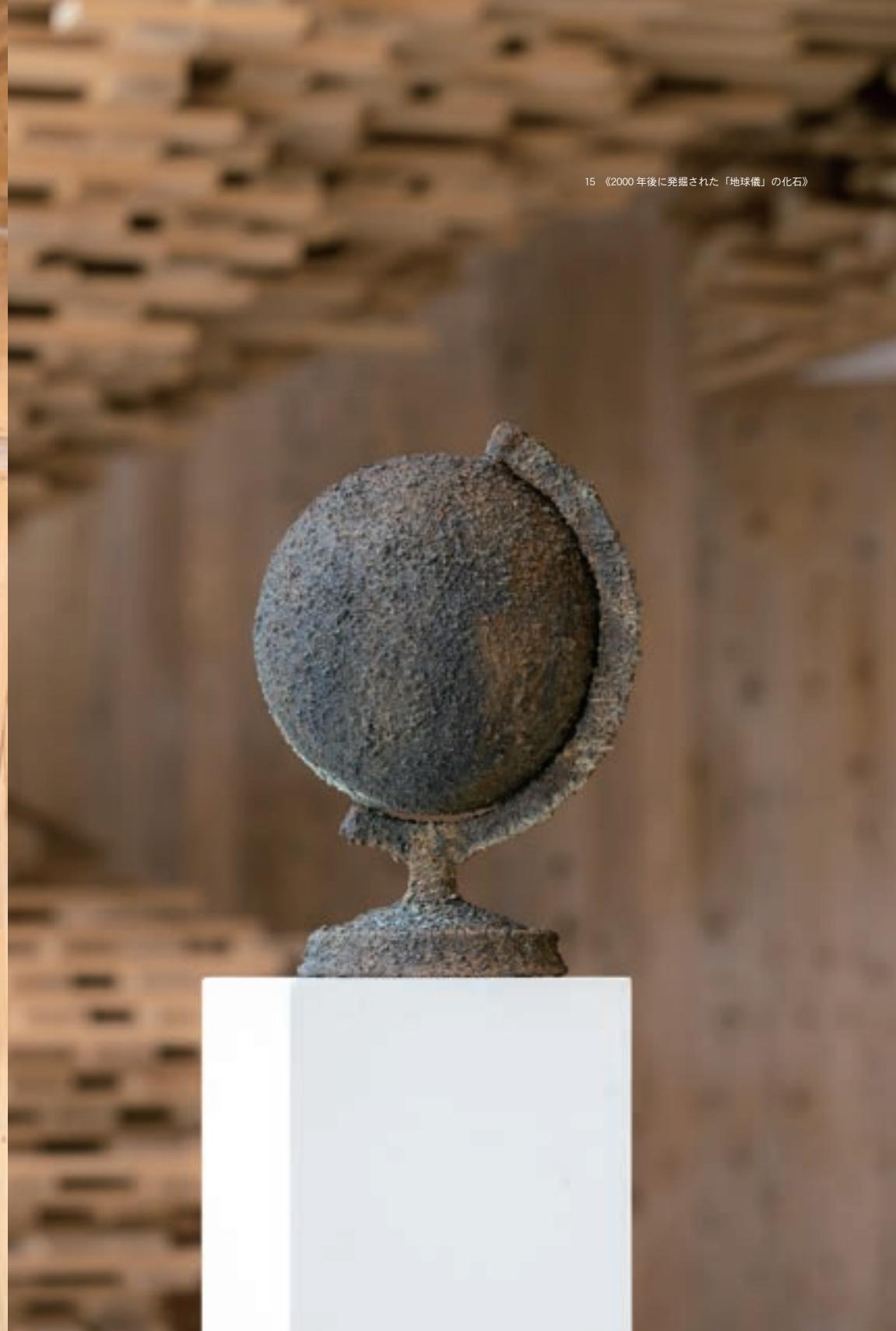
この大きな空間は「41世紀の発掘現場(21世紀頃の遺跡)」です。発掘が進むにつれ、地層(たくさんの木で構成された階段の装飾)があらわになってきています。ポンペイの遺跡(1世紀後半頃)は、火山灰や溶岩であつたう間に埋もれてしまつたので、様々な生の瞬間のまま固められた人型が各所から出てきました。この「41世紀の発掘現場」でも、大小様々なサイズのキューピー人形をはじめ、色々なモノが化石となって各所に埋蔵(展示)されています。

PLANET EXCAVATION SITE Excavation Site 2000 Years Later - Find Kewpie !

This large space is the "41st century excavation site (circa 21st century)". As the excavation progresses, the strata (the decoration of the stairs composed of many lumber planks) are being revealed. The ruins of Pompeii (circa late 1st century) were quickly buried by volcanic ash and lava, so the various forms of human figures, hardened as they were in the moment of life, have emerged from various parts of the site. At the "41st Century Excavation Site," various objects, including Kewpie dolls of large and small sizes, are exhibited as fossils all over the place.



16 《2000 年後に発掘された「キューピー人形など」の化石》(部分)



15 《2000 年後に発掘された「地球儀」の化石》



16 《2000年後に発掘された「キューピー人形など」の化石》(部分)



PLANET CARE

2000年後に発掘された介護



2000 年後に発掘された介護

介護でよく使われていたという車椅子。

その歴史は紀元前までさかのぼると言われており、椅子（家具）に車輪の付けるというアイデアは、21世紀までも続いていました。

41世紀の今では全く違った発想で移動する方法になっていて、車椅子はなんだか21世紀の象徴のようです。他にも21世紀の介護用品はいろいろ出土していて、当時の社会問題を静かに語りかけてきます。

PLANET CARE Care Excavated 2000 Years Later

It seems that wheelchairs were often used for nursing care situations.

Its history is said to date back to BC. The idea of attaching wheels to chairs was very popular and continued till the 21st century.

Nowadays, the 41st century, the way of movement has changed to a completely different conception, and it is different from those days that the wheelchair is somewhat of a symbol of the 21st century.

Various other 21st century care products have also been excavated, which quietly tell us about the social issues at that time.



17 《2000 年後に発掘された「車椅子」の化石》

18 《2000 年後に発掘された「尿瓶＆吸い飲み」の化石》

2000 年後に発掘された家～育児

ここは 41 世紀に発掘された家です。

2000 年前のある瞬間で時は止まってしまい、壁や仕切りは崩れ落ちて無くなっています ...。

詳しく調べてみると、この「柴川」という家族は、夫婦共働きで、7 歳の息子と 0 歳の娘との 4 人暮らし。一見すると平和で幸福に見える柴川家。

しかし、実際は毎日“事件”が勃発し、妻にとっては平和も幸福も、安らぎさえも感じられない日々が続いているかもしれません。育児に家事、仕事や健康、そして障がいや認知症、介護の問題と、諍いの種が家中に渦巻いているようです。

2000 年後に発掘されたこの家は、当時の生活とその背後の社会が抱える様々な問題をリアルに伝えています。

こっそりと、その様子をのぞいてみましょう！

PLANET HOME - CHILDCARE House excavated 2000 Years Later - Childcare

This house was excavated in the 41st century.

Time stopped at a certain moment in 2000 years ago, and the walls and partitions have been ruined...

On closer inspection, we found that this "Shibakawa" family had a double-income husband and wife with a 7-year-old son and an infant daughter. At first glance, the Shibakawas look peaceful and happy.

However, "incidents" broke out every day, and the wife may not have been feeling peace, happiness, nor even comfort. The seeds of conflict seem to be swirling in the house: childcare, housework, business, health, disability, dementia, and caregiving issues.

The house, excavated 2000 years later, vividly conveys the various problems of life and the society at that time behind it.

Let's take a peek at the situation secretly.





20 《2000年後に発掘された「キューピー人形（マスクを付けた息子7才）」の化石》



26 《2000年後に発掘された「おもちゃ棚＆ズボン（ぼくを真似した息子の抜け殻）」の化石》

27 《2000年後に発掘された「時計（小学校登校に向けて、遅刻ギリギリ時刻）」の化石》



24 《2000年後に発掘された「風呂場（遊ぶ娘 0才 10ヶ月）」の化石》

25 《2000年後に発掘された「洗濯物」の化石》



30 《2000 年後に発掘された「流し台」の化石》
29 《2000 年後に発掘された「寝室（掃除するから早くどいて！）」の化石》
21 《2000 年後に発掘された「能面（マスクを外したおくさん）」の化石》



32 《2000 年後に発掘された「鬼面（これからマスクを付けるおくさん）」の化石》





2000 年後の収蔵庫

ここは「41世紀の蒜山博物館」の収蔵庫。

蒜山周辺から発掘された様々なモノが、1階の研究室で分類整理された後、収納ケースに入れられてこの部屋に納められています。

この分類は、41世紀の考古学者や学芸員が行ったもので、未整理のものもあります。

彼らによる勘違いや21世紀にはなかった分類もあるかもしれません。

PLANET STORAGE The Storage Room 2000 Years Later

This is the storage room of "The Hiruzen Museum of the 41st Century"

Various objects excavated from the Hiruzen area were categorized and organized in the laboratory on the first floor, and then put into storage cases.

This classification was done by archaeologists and curators in the 41st century and some of them have not been sorted out yet.

There may be some misunderstandings or classifications that did not exist in the 21st century.



35 《2000 年後に発掘された化石群 1（整理中の出土品）》

36 《2000 年後に発掘された化石群 2（整理済みの出土品）》

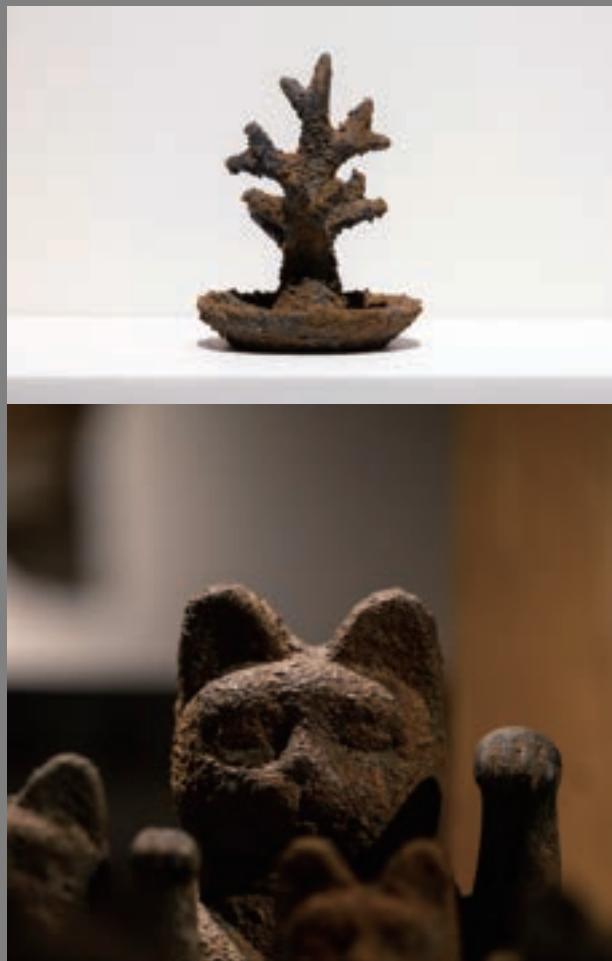
37 《2000 年後に発掘された絵画の化石群（モネ、セザンヌ、ルノワール、ムンク、ゴッホ、ヒカソ他）》



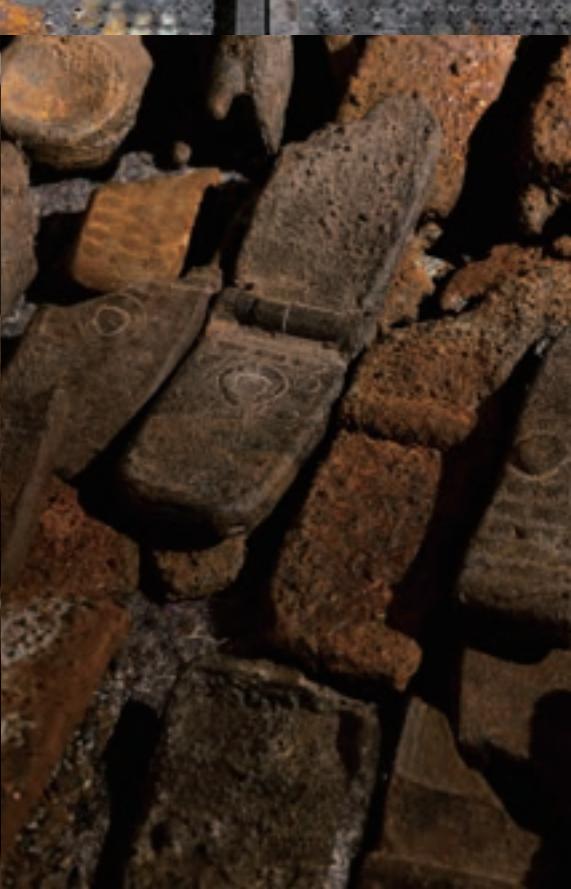
34 《2000 年後に発掘された「カンヴァス (サムホールサイズ)」の化石》

33 《2000 年後に発掘された「アクセサリー掛け (GREENable HIRUZEN ロゴマークの見立て)」の化石》

36 《2000 年後に発掘された化石群 2
(整理済みの出土品)》(部分)







「41世紀の蒜山博物館」には、21世紀を生きる 私達が、生活や社会の問題について考えていくヒントが隠されているかもしれません。

The Hiruzen Museum in the 41st Century may contain hints for us living in the 21st century to think about our daily lives and social issues.





PLANET TOMB MUSEUM

Ancient Tomb Museum of the 41st Century

「奥ノ山」と「未来」を往復する。
Going back and forth between "the Past" and "the Future".

～アートと考古学のコラボレーションプロジェクト～
柴川敏之展 | 41世紀の古墳// パーフェクション

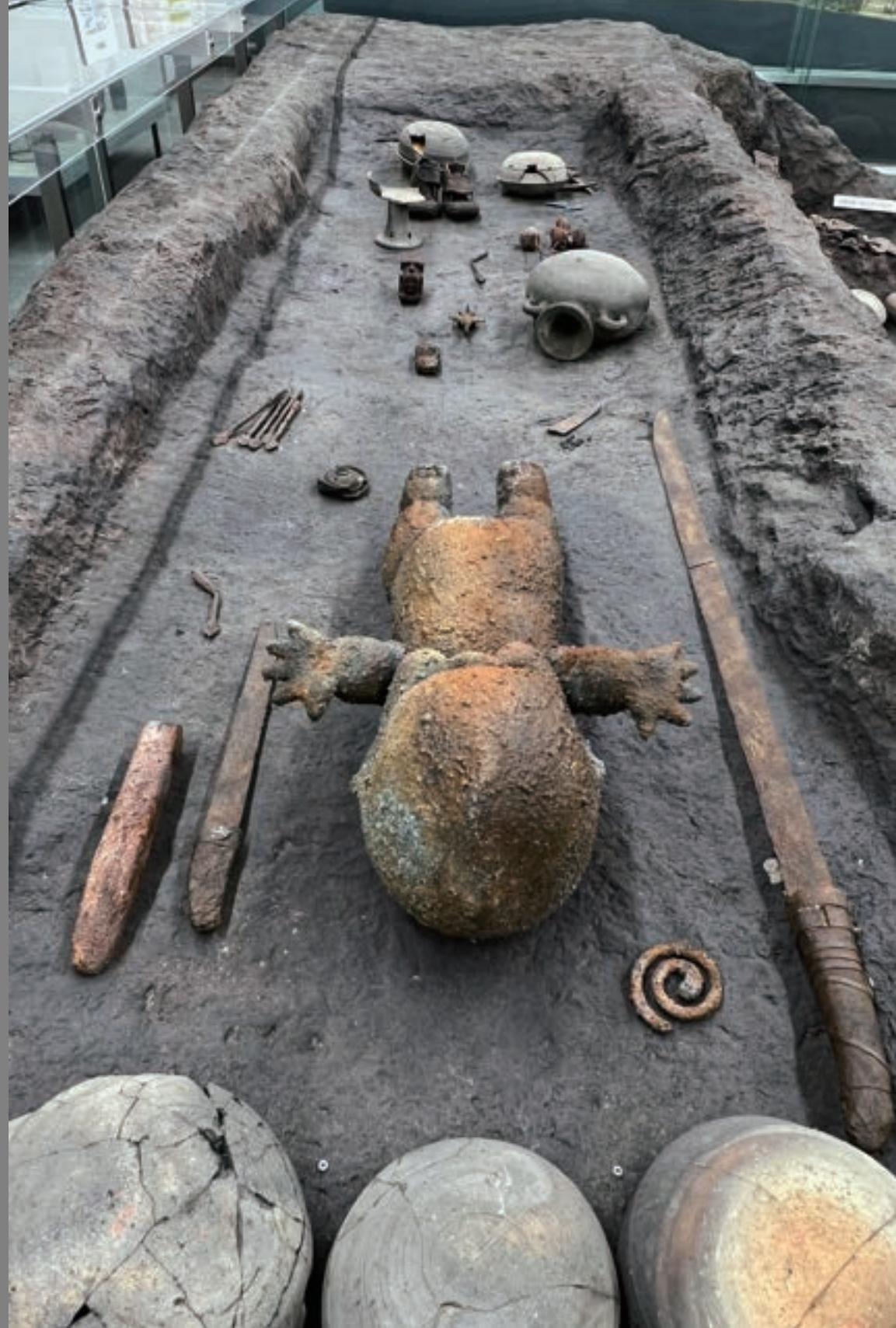




常設展示「古代の蒜山」には、真庭市郷土博物館所蔵の「四ツ塚古墳群の発掘資料（出土品）」が中心に展示されており、本展ではその中に柴川作品（黄緑の丸シールが目印）が一緒に展示されています。



四ツ塚古墳13号墳の遺構（レプリカ）の中にも、
柴川作品が設置されています。





ワークショップ作品展示

2000年後の未来遺跡 in 真庭

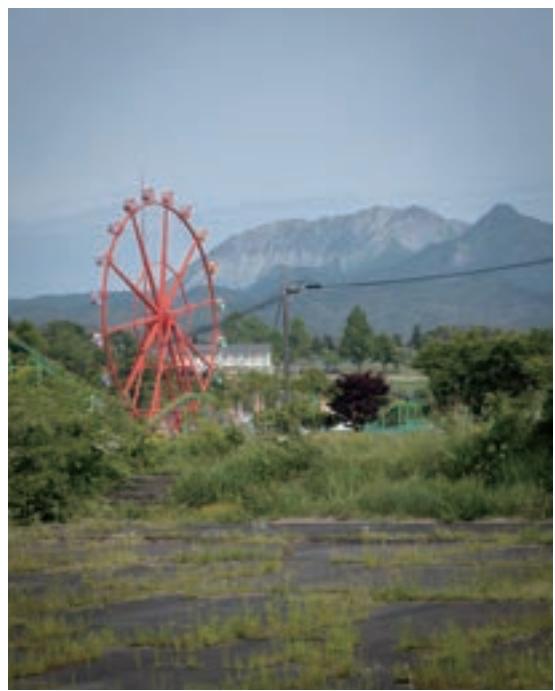
壁面の作品は、4つのワークショップで制作された作品です。(p.84 参照)

現代の身近なモノ、この地域で使われていたモノ、小学校で使うモノなどが、ローラー拓本によって2000年後の化石や発掘現場のように写し取られています。

全体の構成は、「2000年後の真庭や蒜山の街並みの地図」になっており、2000年後に発掘されたこの地域の遺跡となっています。この壁面作品の上には、12個の柴川作品が土から出てきたように設置されています。

手前にある四ツ塚古墳群の模型には、3つの柴川作品が設置されています。





蒜山に舞い降りた鶴

柴川 敏之

今から約2000年前、イタリアのポンペイの町は、火山の噴火によって一瞬にしてその姿を消した。私たちが生きている現代社会は、地震や洪水等の自然災害だけでなく、戦争や核の問題など人為的な脅威もある。現代は、ポンペイの時代よりもさらに危険な時代と言えないだろうか。もし2000年後の41世紀に我々の生活が、遺跡や化石化した出土品（ここでは化石と呼ぶ）として発掘されたとしたら一体どうなっているのだろうか。私は“2000年後”という遠い未来の視点で、今の時代を俯瞰しながら制作活動をしている。

2021年8月、本展キュレーターの三井氏と共に、私にとってはのどかなリゾート地のイメージが強かった蒜山を久々に訪れた。しばらく風景を楽しんだ後、真庭市蒜山ミュージアムへ向かう前に真庭市蒜山郷土博物館へ行き、特別展「蒜山原陸軍演習場の全貌～守り、伝え、誓う」を鑑賞した。前原館長から蒜山には戦時中、日本一の広さの陸軍演習場があったこと、毒ガスの兵器が使われていたことや広島県の大久野島^{*1}との関係などについて伺い、驚いた。常設展示室では、蒜山の地形が多数の火山によって形成され、旧石器時代から今日まで、多くの人間の営みがあったこともお聞きした。蒜山は私のコンセプトを包含してくれているような地域である気がした。

この体験を元に、蒜山ミュージアムでの「41世紀の蒜山博物館」の展示プランでは、蒜山地域が近い将来に自然災害や人為的な災害に見舞われると想定し、2000年後にこの地域から発掘された化石（柴川作品）^{*2}を、博物館的に構成しようと考えた。

当初、展覧会の導入部分では戦車の玩具と軍人のフィギュアの化石を置き、実際にこの地域で使われていた砲弾と並べて展示し、蒜山の陰の部分に焦点を当てた展示を考えていた。それを手掛かりに、2000年後の蒜山とその発掘現場、そこから出土した蒜山を象徴するモノや生活の品々の化石を並べた展示室、当時の家庭の様子

の遺跡、これらを調査する未来の考古学者の研究室と博物館の収蔵庫へと続く…このような展示構成を、隈建築の木材の集積による階段や三角形の空間などの特性を生かしながら考えていった。

蒜山をテーマにした最初の2室には、蒜山郷土博物館から、私の作品の色や質感と良く似ていると思われる実物の砲弾と古墳時代の馬具を借用させて頂き、化石作品と合わせて展示した。また、蒜山郷土博物館の常設展示室（旧石器時代～古墳時代の出土品）では、化石作品を持ち込んで関連性を持たせたコラボ展示を計画した。

その後、蒜山ミュージアムで展示を行う約2週間に、ロシアによるウクライナ侵攻のニュースが流れ、導入部分の展示プランを変えることにした。砲弾を中心に置き、壁面側に戦車の玩具と複数の牛のフィギュアの化石を並べ、その背後にリモコン、対角線上に折り鶴の化石を設置しメッセージを込めた。

会期中、2000年後の蒜山の町並みに戦車が並んで発掘されている様子を表した作品《2000年後の考古学者の机2（蒜山の街を復元中）》のような出来事が、現実の光景としてウクライナで立ち現れていることをニュースで知った。のどかに思われた蒜山が、ウクライナや私が育った広島と重なり、いつどこで何が起こってもおかしくない時代であることを実感した。広島から岡山に移って12年が過ぎた。今改めて、戦争や原爆の歴史が日々身近にあった広島での生活が、私の思考や作品制作に大きな影響を与えていることに気付かされた。

2000年後をテーマに制作活動を始めて、約30年になる。2000年というスパンから見れば、このごく短期間に、いくつもの大震災や集中豪雨、戦争や原発事故、パンデミックなど、当時の私が予想もしなかった出来事が次々と起きている。こうしてみると世界の状況は、30年前よりもむしろ悪くなっているようにさえ思う。これからも恐らく加速度を増して様々なことが起こり続けるに違いない。

歴史は過去、現在、そして未来へと続き、我々は長い歴史の最先端に生きている。2000年後の未来を考えるということは、現在を考えることである。我々は過去から学び、持続可能な未来を創造していかなければ、41世紀には「化石化した地球（儀）」になってしまふ確率は高いだろう。

2000年のスパンに対して人生は一瞬である。残されたわずかな時間を制作に捧げる決意を新たにすると共に、化石作品を作らなくても良い社会や未来になることを願わざにはいられない。折鶴の化石に願いを込めて。

* 1. 戦時に毒ガス製造工場があり、地図から消された島とも呼ばれる。

* 2. これらの作品は、蒜山を象徴するモノや日常の身近なモノを絵画技法により出土品や化石のように変換させている。具体的には、これらのモノをキャンバスと捉えて自作の絵具を塗り、1層を100年（1世紀）と考えて20層塗り重ね、後に部分的に何層かを削り取ることにより“2000年後というイメージ”を描き出していく。

「未来」と「過去」の往復 — 柴川敏之さんの作品展に寄せて

前原 茂雄

歴史学者、真庭市蒜山ミュージアム・蒜山郷土博物館 館長

2022年春、蒜山郷土博物館は開館30周年を迎えた。国史跡・四ツ塚古墳群に隣接した立地を活かし、原始・古代史を中心としつつ、蒜山地域の歴史と文化を紹介してきた。その後、中世史以降の成果も加え、現在では旧石器時代から現代までの蒜山地域史を概観する施設として歩みを続いている。

開館30周年という節目を迎え、立ち止まって考えてみたいことがある。「蒜山地域はこれまでどのような歩みをしてきたのか」という問いと同時に、「これからどのような歩みをしていくのか」という命題である。そして、それはたんに蒜山地域だけのことにはとどまらない。現在に生きる人間や社会すべてが等しく、自らに背負った命題でもある。未来の姿を考えることは、時として夢多き作業だが、時として深刻さも随伴する。可能性が無限にあるように見えて、じつは現在のあり方を基準に考えると可能性には限定もあるからである。自然環境、戦争、人権の問題、枚挙に遑がない。私たちは未来に無限の可能性を期待しながら、現在の諸問題の行方によっては、その選択肢が狭いことに気づかされていく。その意味で、未来を考えることは、現在を考えることと同義である。一方、現在の問題の基礎は、過去にある。過去の教訓に学び、現在を知り、そして未来を展望する。豊かな未来を想像して、現在や過去に往復することは、自らだけでなく、社会や世界をよりよくしていくための一歩となりうる。

柴川敏之さんの作品は、そうした時間の往復を、穏やかな形で私たちに求めている。未来に何を残すのか。何が残っているのか。そして、残されたものは本当にそれよかつたのか。さらには、形として残らないものの豊かさ、すばらしさとは何か。様々な問い合わせを投げかける。2000年後の未来を想像することは、一見、気が遠くなるような、そして別物の世界のように感じる。しかし、間違いなく、現在の私たちの暮らしの延長線上にある世界なのだ。ともすれば、私たちは10年後、50年後、100年後といった感覚で

未来を想像しがちだが、一方で、2000年後という大きな尺度で考える視点も忘れてはならない。現在、私たちは3万年以上前の旧石器時代の考古遺物を見ることで、自然環境や資源の問題を考えることができるのだ。過去や未来を大きく捉えることは、短期的な尺度とは異なる課題を照射させるのかもしれない。

一般に、世界や日本に残された歴史資料の多くは、最初期の時代には庶民のものが多く、共同体や国家の成立と共に為政者に関するものが増えてくる。そして、為政者と庶民の資料が等しく残っていくことになる。翻って、柴川さんの作品群を見てみると、そのほとんどが現代の庶民の何気ない生活の一齣であることに気づかされる。それが意味するところを探ることも、柴川さんとの対話になると思っている。

現在、発掘された考古遺物は、比較研究が進展したこともあり、使用した階層や性別、地域的特性が明らかになりやすい。一方、グローバリズムやジェンダーレスが進んだ現代社会においては、使用されたモノの属性は多様化している。2000年後、モノが出土しても、それが使用された地域の個性が捉えられるだろうか。それを使用した人の肌の色や性別などを知ることができるだろうか。そして、それを特定することが必要な世の中なのだろうか。

いったい、未来には何が残っているのだろう。私たちの過去と現在、そして未来を見つめる旅を、柴川さんの作品を切符代わりとして、始めてみるのも悪くない。柴川さんの作品には、そうした旅を可能とする力がある。魂がある。



柴川敏之展を見て | できなかった展覧会「柴川敏之×岡本太郎」

川延 安直

福島県立博物館 専門員（前副館長）

今でも悔やまれることがある。長く生きれば恥ずかしかったこと、悔しかったことが積み重なっていくのは人の世の常。私事だが、昨年度、定年で現場を離れた。やはり悔やまれることがある。

2009年10月、企画展「岡本太郎の博物館ははじめる視点博物館から覚醒するアーティストたち」を福島県立博物館で開催した。岡本太郎は1930年代留学中のパリのミュゼ・ド・ロンヌ（民族学博物館）で大きな衝撃を受けた。それは以後の岡本太郎の芸術を確実に変えるほどのものだった。

終戦後は東京国立博物館で予期せず「縄文」を「発見」する。考古学の資料として陳列されていた土器や土偶に遭遇し「からだじゅうがひつかさまわされるような気がしました。」と後に語っている。

そして、3度目の博物館との出会いが1970年大阪万博テーマ館のテーマ・プロデューサー就任である。今、万博跡地は広大な記念公園として人々の憩いの場になっている。無数のバビリオンは全て撤去されたが、今もある「太陽の塔」は超然と人々を睥睨している。「太陽の塔」はあまりに有名だが、岡本太郎の仕事はそれだけではない。大阪万博の大テーマが「人類の進歩と調和」であったのに対し、テーマ館に世界中の「仮面・神像・生活用具」を集めた。

その理由を著書『美的呪力』で岡本太郎は次のように記している。

ましてテーマは「進歩と調和」だ。未来のほうにばかり眼が向かってしまって、虚飾に浮き上がった祭典になってはつまらない。

それに対して、テーマ館こそは何か人の心の奥底に、意識・無意識に、グンとぶつかってくる、人間生命の混沌の重みをすえたい。つくりものではない、生活の根っこから自然にわきあがり、形づけられたモノ。それを民衆生活のもっともひらいた感動である仮面・神像にしぼったのだ。

プロジェクトが組まれ世界各地で収集された資

料は、「太陽の塔」のほど近く、国立民族学博物館に引き継がれ今も来館者に「グンとぶつかってくる。」

岡本太郎の創造の源泉には、パリ、東京、大阪で出会った博物館があった。

岡本太郎にならい、博物館が、アーティストのみならず、人間の創造活動の現場であってほしい。その思いによる小さな試みが企画展「岡本太郎の博物館はじめる視点博物館から覚醒するアーティストたち」だった。

企画展示室には岡本太郎が撮影した東北、縄文土器の写真作品、取材ノート、太陽の塔関連資料、そして福島県立博物館収蔵資料を再構成した作品渡邊晃一氏（福島大学教授）による《東北の太陽の塔 いのちのいのり / 生命樹》を展示し、常設展示室、ロビー、前庭には各アーティストが既存、新作の作品を展示資料に並べ、紛れ込ませ、対峙させ、展示了。さらにワークショッピング、パフォーマンスを交え立体的な展覧会にできたと思っている。

前置きが長くなってしまった。私の大きな後悔は、この展覧会への柴川敏之さんの参加を実現できなかっただことだ。

2003年広島県立歴史博物館で開催された「2000年後の冒險ミュージアム」での活動には大いに興味を持ち、励まされていた。当然、柴川さんは「岡本太郎の博物館」に最も招聘したいアーティストのお一人だった。

つまらない話だが、勤務していた福島県立博物館は毎年の予算減額で現在に至るまで長い間ジリ貧状態にある。なぜかそのシーリングの大鉈が一気に振るわれたのが、この年だったのだ。当時、福山在住だった柴川さんを招聘できる予算は消えた。

今回いただいた機会に2009年に戻って柴川さんの「岡本太郎の博物館」参加案を構想してみたい。

福島県立博物館の常設展示室は導入部のタイムトンネルから原始、古代、中世、近世、近現代の展示コーナーがコの字で続いている。出入り

口はロビーに面している。原始と近現代がロビーを挟んで並んでいるわけだ。

原始と近現代を結ぶ空間を柴川作品の展示スペースとし、コの字を口の字にする。そこに柴川さんの作品を導入し、近現代の遺物が一巡して滑らかに原始の遺物に接続させる。直線的な発展史観で捉えられがちな歴史が円環をなすもの、循環するものとして捉え直すのだ。

近現代のコーナーは戦時中の暮らしから戦後復興を担った常磐炭田、只見川の電源開発などを紹介して終わっている。炭鉱はすでに半ば遺跡と化し、巨大な水力発電所は今なお機能しながらもそこには人の姿はなく古代のピラミッドや神殿遺跡を思わせる。莫大な労力を要した土木工事の展示の隣にはロビーを挟んで人類最古の道具である石器が接していることになる。インシュタインは、「第四次世界大戦で人類が戦う武器は石と棍棒」だと言い残したそうだが、そのようなディストピア觀ではなく、既存の學術的な思考を脱白させてくれる表現を求みたい。この空間を柴川さんならどう料理してくれただろう。

真庭市蒜山ミュージアム「柴川敏之展 | 41世紀の蒜山博物館」、真庭市蒜山郷土博物館「柴川敏之展 | 41世紀の古墳ミュージアム」の会場を歩きながら果たせなかつた展覧会を夢想していた。

真庭市蒜山郷土博物館・蒜山ミュージアムの前原茂雄館長さんと三井知行学芸員さんからうかがった話が実に印象深かった。

柴川さん作品のアイコンであるキューピーを知らない世代が増えているという。若い世代には怖いものに見えるのだそうだ。時代が経るとはそういうことで、当たり前のだが、軽い衝撃だった。思えば自分も小さい頃はキューピーを可愛いなどとは思っていなかった。物体としてのモノとそれを取り巻くストーリーは遺物と歴史の関係の縮図ではないのか。

また、古墳の石室から出土した歯の隣にさりげなく置かれた（展示された）歯ブラシと入れ歯の作品（遺物）を見た年配の女性は、「昔も今

と変わらないね。」と納得していたそうである。ジョークなのか真面目なのか。深い感想である。古代人も歯痛には悩まされたであろう。そんな当然の日常に時間を超えて思いを致す感性が重要なのではないか。それこそが歴史を学ぶ意義であり、その感想を引き出すのが博物館の使命ではないか。柴川さんの作品には研究者、学芸員が見落としてしまう遺物の心を通わせる術が隠されている。

福島県立博物館には2009年にはなかつた一群の資料が2011年以降大量に収蔵されている。言うまでもない東日本大震災とその後の東京電力福島第一原子力発電所事故の関連資料である。津波の巨大な力で飴のように捻じ曲げられた道路標識などのインパクトの強い資料とともに福島県特有の資料として一次避難所関連の資料がある。地震からの避難のための避難所がその後の原発事故で急遽閉鎖、移動したことにより、そこは時間が断ち切られた場となった。例えば食べられるこのなかつたホイルに包まれたままのおにぎり、温めるために薬罐に並べられたままになったお茶の缶。

柴川さんの作品の中でもアイロニーの効いた作品と言えば、ソフトクリームと脱ぎ散らかした靴下だと思うが、停止した時間、主人が消えた暮らしを思われるこれらの作品は原発事故を近くで経験した者にはリアルな恐怖とユーモアが表裏一体になった作品に見える。

遺物、歴史にはカタストロフィがつきまとう。戦争、疫病が決して過去の遺物ではないことを私たちはここ数年で思い知らされた。悲惨を本当の遺物にしてしまうためにアートの柔らかさ、博物館の寛容性はますます大事な人類の力になると信じている。

すでに紙数を大きく超えてしまった。これからも柴川さんの作品はアートとミュージアムの境界を搅乱してくれることだろう。

なぜ柴川敏之なのか

三井 知行

真庭市蒜山ミュージアム学芸員

今回の「柴川敏之展」において私がなじ得た一番の「仕事」は何か。おそらくそれは企画の早い段階で真庭市蒜山郷土博物館と作家をつないだこと。柴川氏もこの点は認めてくれるのではないか。

蒜山ミュージアムには一般的な美術館とは異なる点が多くある。その説明を兼ねて出品作家には早い段階で一度会場を見てもらうのだが、その足で蒜山郷土博物館（蒜博）に立ち寄ったのである。これはもちろん、蒜博の館長が当館の館長も兼務しているので、作家の紹介と挨拶のためである。しかし「歴史」や「発掘」という要素を作品に含み、何度も歴史博物館で展覧会をしてきた作家を、歴史の専門家である蒜博館長に引き合わせることで、面白い連携や化学反応が起こるのではないか、という期待もあった。結果、この判断は大当たりだった。この日を境に「柴川敏之展」は音を立てて動き出したとさえいえる。当時の蒜博の展示は「蒜山原陸軍演習場の全貌へ守り、伝え、誓う」。戦前の日本軍と蒜山の関わり、大正期の軍馬生産や終戦までの約10年間置かれていた大規模な陸軍演習場についての、丹念な調査に基づいた意義深い企画であった。現在の蒜山高原を漫然と眺めていたのではわからない、わずか1世紀の間にあった軍隊との繋がりは、大災厄としての戦争・大量破壊兵器とも結びつき、作品の根底にある作家自身の体験とも共鳴するものがあったようだ。

そしてこの後、会場全体を2000年後の蒜山の博物館に見立てるこいや、ロビーを含めた各展示室の「収蔵庫」や「発掘現場」といった性格付けなど作家からの提案を元に比較的順調に決まっていった。また、蒜山郷土博物館との連携として、演習場で使われた砲弾、さらには古墳からの貴重な出土品も借用できることになった。これにより現代と未来だけでなく、遠い過去も含めた重層的な時間を示唆する展示が可能となったのである。会期直前にウクライナの戦事が起り、新作の「戦車の化石」が、どうしても直接的に現実の戦争と結びついてしまうため、急遽展示方法を変更するといったことはあった

が、蒜山郷土博物館を訪れた日から一本の線でつながっているような感じで展覧会初日を迎えることができた。

さらに蒜博では、最初数点の作品を展示できなかと考えていたものが、考古展示室を使った展覧会「アート&考古コラボ企画 柴川敏之展 | 41世紀の古墳ミュージアム」に発展し、同館の開館30周年記念展という位置付けまで得て、結局12月までのロングランとなった。

さてここで話を戻して、蒜山ミュージアムの事実上最初の企画展示になぜ柴川敏之なのか、ということについて述べてみたい。

現代美術を展示する新しい施設というと、イキのいい若手の注目株みたいな作家を期待する関係者も多いようだ。実際にそういう声も聞いたし、そのような展覧会も蒜山ミュージアムの役割の一つかもしれない。しかしそれは館として最初の現代美術展としてふさわしいだろうか。自然との共生やSDGsを掲げる美術施設でなぜ現代美術なのか、ということを考えると、年齢や美術界内部の評価は選択基準とはなり得ないだろう。逆に、あからさまに自然との共生やSDGsなど“良いこと”を謳った「アート」が持続可能とは思えない。多くの人に訴えかけ、時には抵抗されながらも、見る人の世界の捉え方や考え方、つまりは知性に作用する作品こそが、本当の意味で共生的で持続可能な社会を考える際の礎となるはずだ。それならば長い蓄積のあるベテランに期待するのも悪くない。その経験値は、空間を無理なく活かした作品配置でもものをいうだろう。他にもワークショップを数種類できる人とか、予算や準備期間などの要素も含めあれこれ考えて、ここは柴川敏之しかない、ということで出品を依頼し、前述の蒜山郷土博物館訪問へつながるのである。

彼の作品を「わかりやすい」という人は多い。しかし正確にはむしろ「入りやすい」というべきだろう。何が起こっているか観てもわからない現代美術も多い中、確かに柴川作品はほとんどの大人が見てすぐに「未来に出土した現代のもの」とわかる。そこで誰でもが持つ「知性」

や「好奇心」が刺激され、個人の中でさまざまな解釈や想像が起こり、鑑賞に豊かな奥行きが生じる…それは古典美術の鑑賞にも近いのではないか。

ローラー拓本によるワークショップは、この鑑賞の心の動きを外在化させたものと考えられる。色を塗りたくるのは原初的な衝動だとしても、そこに不意に現れた形に好奇心が刺激され、現れた形に解釈を与えようとする知性も働き出す。また、彼の作品は手製の絵具を20回塗っては乾かし（1回100年の設定）さらには部分的に削り落とすことで2000年の歳月にリアリティを持たせている。それは既製品の表面に描かれた物質性の強い一種の抽象絵画と捉えることも可能だ。その抽象絵画的な手法で現実の社会に切り込むような作品を制作している点も興味深い。

さて、2000年という歳月は容赦のないものである。同時代的な価値づけなど押し流し、遺跡として出土するのは「残したいもの」ではなく、恥ずかしいものの、都合の悪いものと一緒に晒される。これは、ともすれば都合よく語られがちな「自然との共生」や「持続可能な開発」に対する一種の批評ともなっており、その意味でも当館第1回目の現代美術展としてふさわしいものであった。

蒜山郷土博物館の展示についても考えてみよう。作家の設定に従って構成される蒜山ミュージアムの展示と異なり、蒜博では元からある考古の展示に作品を紡がせる形となつた。現在から太古を考る視線の背後に、未来から現代への眼差しが見え隠れすることで、現在の絶対性が揺らぎ、タイトル通り「過去と未来を往復する」展示となる。作家によると、考古遺物と現代のものが一緒に出土する状況は、将来博物館が遺跡として出土したら起こり得る事態であり、博物館が却って未来の考古学者の混乱を招くという皮肉な状況をも暗示する展示となつた。

作品の選択と配置は作家だけではなく館長も参加し、馬具の遺物の脇に自動車のエンブレムの作品、煮炊きに使う土器の棚にカップ麺（の化石）というように、意味的、形態的な関連を持たせた。

一見いたずらめいた展示だが（その意味で近年話題のパンクシーも連想させる）、肯定的にユーモアや遊び心と捉えていただいた方が多かったようで、ここでもまた作品の「入りやすさ」が人々を歴史への思索にいざなったのではないかと思う。

今回の展覧会は内容的にも外部連携という観点からも、初回の現代美術展としては望外の充実したものとなった。これは、展示が具体化する前から寛容な理解を示してくださった蒜山郷土博物館をはじめ、多くの協力をいただいた連携先の各校、そして何より柴川敏之氏の尽力の賜物である。私がこの展覧会になした“仕事”など、やはりちっぽけなものに過ぎない。

When Cranes Descended on Hiruzen

Shibakawa Toshiyuki

Approximately 2,000 years ago, the town of Pompeii in Italy was instantly obliterated by a volcanic eruption. In present-day society, we face the threat not only of natural disasters such as earthquakes and floods, but also of manmade catastrophes such as wars and nuclear radiation. Is it not valid to say that the current era is even more dangerous than the age of Pompeii? What would happen if, 2,000 years from now in the 41st century, our lives were unearthed in the form of relics and petrified artifacts (which here I am calling "fossils")? While working from the perspective of the distant future two millennia from now, I am holding a bird's-eye view of the present day in mind.

In August 2021 I joined Mr. Mitsui, the curator of this exhibition, in visiting Hiruzen, an area which I had not been to in a long time and which for me was strongly associated with tranquil resort-like environment. After enjoying the scenery for a while, we went to the Museum of Hiruzen Area, Maniwa City to see the special exhibition Panorama of the Hiruzenbara Army Training Ground: Protect, Preserve, Promise. I was astonished to learn from the museum's director, Mr. Maebara, that Hiruzen had the largest army training ground in Japan during World War II, that toxic gas weapons were used there, and that it had ties with Ohkunoshima Island¹ in Hiroshima Prefecture. In the permanent exhibition gallery, we heard that the topography of Hiruzen was formed by numerous volcanoes, and that the area has been home to much human activity from the Paleolithic Era to the present day. I felt that Hiruzen was a region that aptly embodied my concept.

Based on this experience, the exhibition plan for Hiruzen Museum of the 41st Century at the Hiruzen Museum assumes that the area will suffer from natural and human-made disasters in the near future, and fossils (my works)² excavated from this area 2,000 years from now are displayed in a manner resembling a natural history museum.

Initially, the idea was to place fossils of miniature tanks and toy soldiers in the introductory section of the exhibition and display them alongside artillery shells that were actually used in the area, thus shedding light on the darker side of Hiruzen. With this as a starting point, the galleries would present Hiruzen 2,000 years from now, an excavation site and the fossils of objects and everyday items representative of Hiruzen that were unearthed there, the remains of what a household looked like in our day, the laboratory of future archaeologists who research these objects, and the museum storage room... The exhibition

was conceived so as to take maximum advantage of the distinctive building designed by architect Kuma Kengo, characterized by stairs made of layered wood, triangular spaces and so forth.

In the first two galleries, both with the theme of Hiruzen, were presented actual artillery shells from the 20th century and equestrian gear from the Kofun Period (roughly the fourth through sixth centuries), which the Museum of Hiruzen Area kindly loaned me. They were quite similar in color and texture to my fossil works, and were displayed alongside them. Meanwhile, in the Museum of Hiruzen Area's permanent exhibition gallery (featuring unearthed artifacts from the Paleolithic to Kofun periods), I presented my fossil works and planned a collaborative display where my works were paired with related historic artifacts.

Then, about two weeks before the exhibition was to open at the Hiruzen Museum, there was breaking news of the Russian invasion of Ukraine, and we decided to change the plan for the introductory section of the exhibition. The artillery shells were placed in the center, a toy tank and several fossilized figures of cattle were placed near the wall, a remote control was placed behind them, and fossilized origami cranes symbolizing peace were placed on a diagonal line with a message.

During the exhibition, I learned from the news that events resembling my work PLANET DESK 2 (Restoration of Hiruzen in Progress), depicting the excavation of a row of tanks in the Hiruzen area twenty centuries from now, were actually occurring in Ukraine. The Hiruzen area, which seemed so peaceful and tranquil, overlapped in my mind with Ukraine and with Hiroshima, where I grew up, and I realized that we live in an era when anything can happen anywhere at any time.

Twelve years have passed since I moved from Hiroshima to Okayama. I was starkly reminded that my life in Hiroshima, where the history of war and the atomic bombing was a close and constant presence, has had a great influence on my thinking and artistic production.

It has been about 30 years since I started working with the theme of "2,000 years from now." In this span of time, which is very short compared to the two millennia I envision, there has been a series of numerous events that I could not have predicted, including a number of earthquakes, torrential rains, wars, a nuclear accident, and a global pandemic. In that sense, the state of the world seems to me to be even worse than it was 30 years ago. All sorts of things are bound to continue happening, and

probably at an accelerated pace.

History consists of the past, present, and future, and today we live at the most recent point on the long arc of history. To think about the future 2,000 years from now is to think about the present day. If we do not learn from the past and create a sustainable future, it is highly probable that we will end up with a "fossilized planet" in the 41st century.

Compared to the span of 2,000 years, a human lifetime is a fleeting instant. As I renew my determination to devote the little time I have left to creating art, I can only wish for a society and a future where we do not need to sound a warning with fossil art objects. This wish is symbolized by the fossilized origami cranes.

Notes

1. Home to a poison gas factory during World War II. Ohkunoshima is known as an island that was erased from the map.
2. These works transform objects and familiar everyday items that symbolize Hiruzen into unearthed artifacts or fossils through painting techniques. Specifically, I treat these objects as canvases on which I apply paints of my own making. I apply 20 layers of paint to each, considering one layer to represent 100 years (one century), and then partially remove some of the layers to create an "image of 2,000 years hence."

Back and Forth Between Future and Past On the Exhibition of Shibakawa Toshiyuki

Maebara Shigeo

Historian and Director, Maniwa City Hiruzen Museum and Museum of Hiruzen Area, Maniwa City

In the spring of 2022, the Museum of Hiruzen Area celebrated its 30th anniversary. Taking advantage of its location adjacent to the Ancient Cemeteries of Yotsuzuka, Hiruzenbara, a National Historic Site, the museum was launched with a mission to showcase the history and culture of the Hiruzen area, focusing on prehistory and ancient times. The museum subsequently added artifacts of the medieval and later period, and today it is a facility that offers an overview of the area's history from the Paleolithic era to the present day.

On the occasion of the 30th anniversary of the museum's opening, there was a question I felt we ought to pause and reflect on, namely "What is the nature of the progress the Hiruzen region has made so far?" This query is not limited to Hiruzen, indeed it is one that everyone living today in every society must shoulder equally. Imagining potential futures can at times be akin to daydreaming, but at times it also has highly serious implications. Possibilities seem endless, but in reality, there are limits to what can be accomplished amid the current state of affairs. The natural environment, war, human rights... the list of issues goes on. While remaining hopeful about the unlimited potential of the future, we find that depending on how various current situations play out, our options may be limited. In this sense thinking about the future is synonymous with thinking about the present, while at the same time, the roots of our current problems lie in the past. We try to learn lessons from the past, understand the present, and look to the future. Imagining a prosperous future and applying what we have imagined to the present and past can be a step toward bettering not only ourselves but also our society and the world.

Shibakawa Toshiyuki's works gently insist that we take such journeys back and forth through time. What will we leave for the future? What will remain of its own accord? Are we choosing the right things to leave behind? And what of the richness and wonder of things that do not remain in physical form? When we envision the future 2,000 years from now, it is a seemingly daunting and alien world, but we must not forget that this world is an extension of our present-day lives. When we think of the future, we tend to think of what we can imagine 10, 50, or 100 years from now, but we should not forget to think of the long term, 2,000 years down the road. Today, we can obtain insights about environmental and resource issues by looking at artifacts from the Paleolithic era, more than 30,000 years ago. Taking a broader view of the past and future may illuminate issues other than those that face us in the short term.

In general, both worldwide and in Japan, most of the relics that endure from the earliest periods are those of common people, but the more communities and nation-states are established, the more of these relics come to be related to the people's rulers. The expansion of communities and nation-states is correlated with an increase in materials related to their rulers, and the number of materials of rulers and those of the common people becomes equal. Viewers of Shibakawa's works will find that most of them point to scenes from the ordinary lives of common people today. I believe that exploring the meanings of these works is part of a dialogue with Shibakawa.

Thanks in part to the progress of comparative studies, the archaeological relics we excavate today are more likely to reveal the hierarchical, gender, and regional characteristics of the people who originally used them. However, in today's increasingly globalized and genderless society, the attributes of the objects we use have become more diverse. If the objects we use are unearthed 2,000 years from now, will it be possible to interpret the distinctive character of the regions where they were used? To determine the skin color, gender and so forth of the people who used them? Will it be a world where it is even necessary to identify them?

What will remain of our present world in the distant future? Shibakawa's works offer a ticket for a voyage with a panoramic view of our past, present, and future. Imbued with soul, his works have the power to make such a journey possible.



Thoughts on Shibakawa Toshiyuki's Exhibition : The Show That Could Have Been — Shibakawa Toshiyuki and Okamoto Taro

Kawanobe Yasunao

Assistant Curator and Deputy Director, Fukushima Museum

There are things in the past that I regret to this day. If we live long enough, it is perfectly normal for people to amass a collection of embarrassing and frustrating experiences. On a personal note, I retired and left the field last year, and sure enough, I still harbor regrets.

In October 2009, the exhibition Taro Okamoto's Museum: Beginning Perspectives. Artists Awakening from the Museum was held at the Fukushima Museum. Okamoto Taro was greatly impressed by the Musée de l'Homme (an anthropological museum) in Paris, where he studied in the 1930s. It was a profound experience that definitively changed the course of Okamoto's art from then on.

After World War II, he unexpectedly "discovered" the Jomon Period at the Tokyo National Museum. He encountered earthenware and clay figures displayed as archaeological relics, and later recalled, "I felt as if I were being turned upside down and inside out."

His third encounter with a historical or ethnological museum was when he was named thematic exhibition producer of the Theme Pavilion at Expo '70 Osaka. Today, the former site of the Expo is a vast commemorative park where people enjoy leisure activities. The innumerable pavilions have all been removed, but Okamoto's monumental Tower of the Sun still glares down at visitors. While Tower of the Sun is extremely well known, it was not Okamoto's only work for Expo '70 Osaka. While the event's main theme was the future-oriented slogan "Progress and Harmony for Mankind," he collected objects from the past — masks, sacred statues, everyday items — from around the world for display in the Theme Pavilion. As to his reasons for this, Okamoto wrote in his book *The Esthetic & the Sacred*:

The theme was "progress and harmony," but it would have been a dull event if it focused solely on the future, bewitching visitors with false and superficial promises. For contrast, the Theme Pavilion needed to be something that penetrated deep into people's hearts and, consciously or unconsciously, hit them with the full weight of chaotic human life. Things that are not designed from the top down, but naturally arise and take shape from the grassroots of daily life. I focused on masks and sacred statues, the most nakedly emotional objects in the lives of common people.

The materials collected for this project from around the world are now in the collection of the National Museum of Ethnology, located very near the Tower of the Sun, and visitors are still "hit

with their full weight" today.

Okamoto Taro's creative vision was inspired by encounters at historical or ethnological museums in Paris, Tokyo, and Osaka. It is my hope that museums will learn from Okamoto's example and become the sites of creative activity, not only for artists but also for people in general. A small step toward this goal was taken with the Fukushima Museum's special exhibition Taro Okamoto's Museum : Beginning Perspectives — Artists Awakening from the Museum.

The special exhibition gallery featured Okamoto's photographs of Tohoku and of Jomon pottery, records kept in notebooks, archival materials related to Tower of the Sun, and Fukushima University Professor Watanabe Koichi's Tohoku-Tower of the Sun, pray through the tree of life, a reconfiguration of materials from the Fukushima Museum collection. In the permanent exhibition gallery, lobby, and vestibule, artists displayed new and existing works alongside, mixed in with, or facing off against the exhibited objects. In addition, workshops and performances were conducted, resulting in a well-rounded exhibition.

My apologies for the lengthy preamble. The great regret I referred to earlier is that I could not invite Shibakawa Toshiyuki to take part in this exhibition. I was greatly intrigued and uplifted by his work in Adventure to PLANET MUSEUM, at the Hiroshima Prefectural Museum of History in 2003. Naturally, Shibakawa was one of the artists I most wanted to have participate in Taro Okamoto's Museum.

Not to bore the reader with details, but the Fukushima Museum, where I was employed and where the exhibition was held, has long been in a state of grinding poverty due to annual budget cutbacks. For some reason, that year the axe of austerity came down particularly hard. The funds that would have been needed to invite Shibakawa, who lived in Fukuyama, Hiroshima at the time, dried up.

Now, I would like to take this opportunity to go back to 2009 and envision what Shibakawa's contribution to Taro Okamoto's Museum might have been. The Fukushima Museum's permanent exhibition galleries are arranged in a horseshoe formation, starting with a Time Tunnel in the introductory section, followed by prehistoric, ancient, medieval, modern, and contemporary sections. The galleries' entrance and exit connect to the lobby on either side, with the prehistoric and the modern and contemporary facing one another.

The space that connects the prehistoric and the modern/contemporary would have been used to exhibit Shibakawa's works, turning the horseshoe into a full circle. With Shibakawa's works presented there, relics of the modern and contemporary era would circle around and smoothly connect to artifacts from prehistoric times. History, which tends to be viewed in terms of linear progress, would be reinterpreted as something that forms a circle, something cyclical.

The modern and contemporary area concludes with exhibits on life during World War II, the Joban coal fields that contributed to postwar reconstruction, and hydroelectric power development along the Tadami River. Today the coal mines are already half in ruins, and while the huge hydroelectric power plant is still operating, its utter lack of human presence makes it resemble the pyramids and temples of the ancient world. Across the lobby from this exhibit of civil engineering projects that required such colossal labor is a display of stone tools, among the oldest known to humankind. Albert Einstein famously said that "World War IV will be fought with sticks and stones," but rather than taking such a dystopian view, I would hope for an art project that positively disrupts conventional academic thinking. What would Shibakawa have done with this space?

Walking through the venues at the Maniwa City Hiruzen Museum's SHIBAKAWA Toshiyuki : Hiruzen Museum of the 41st Century and the Museum of Hiruzen Area, Maniwa City's SHIBAKAWA Toshiyuki: Ancient Tomb Museum, Going Back and Forth Between "the Past" and "the Future," I imagined the show that could have been.

Maebara Shigeo, director of both of the museums, and curator Mitsui Tomoyuki told me something that made a powerful impression on me: an increasing number of young people do not recognize Kewpie, the doll that is among the most iconic presences in Shibakawa's works. The younger generation sees Kewpie as something frightening. It is only natural for perspectives to change over the years, but it came as a bit of a shock to me. At the same time, looking back, when I was a small child I did not find Kewpie to be particularly cute. This seems to point to the way things as physical objects and the narratives around them epitomize the relationship between artifacts and history.

On seeing the toothbrushes and dentures (Shibakawa's works/artifacts) casually placed (displayed) next to teeth excavated from the

stone chamber of a burial mound, an elderly female visitor said with satisfaction, "Ancient times were no different from today." Was she joking, or serious? It made a profound impression on me. Even the ancients must have suffered from toothaches. I think it is vital that we have the imagination and empathy to envision such mundane aspects of daily life, regardless of the era.

Therein lies the true significance of learning about history, and it is the mission of museums to elicit such impressions. Within Shibakawa's works lurk the means to commune with the hearts of artifacts, a process that researchers and curators tend to neglect.

Since 2011, the Fukushima Museum has acquired a large volume of archival materials that were not in its collection in 2009. Needless to say, they are related to the Great East Japan Earthquake and tsunami, and the subsequent disaster at the Tokyo Electric Power Company's Fukushima Daiichi Nuclear Power Station. In addition to objects that make a stunning impact, such as road signs twisted like ribbons by the enormous force of the tsunami, there are materials related to initial evacuation centers that are unique to Fukushima Prefecture. Shelters for those who fled from the earthquake and tsunami were hastily closed and relocated due to the subsequent nuclear power plant accident, and this created sites that were frozen in time: rice balls wrapped in aluminum foil that were never eaten, cans of tea sitting in a kettle waiting to be heated up.

Among Shibakawa's "fossil" works, a soft ice cream cone and a discarded pair of socks appear to be the most ironic, but these works, which evoke frozen time and daily life from which the person living it has disappeared, strike those who experienced the nuclear accident first-hand as inextricably linking humor with visceral fear.

History and its artifacts are riddled with catastrophes. We have been reminded in recent years that wars and plagues can by no means be relegated to the past. It is my belief that in the future, the flexibility of art and the warm welcome offered museums will become increasingly crucial if humanity is to make such tragedies history.

I have already written far more than I intended. Let me close by saying that in the future, Shibakawa's works will continue to positively disrupt the boundaries of art and museums.

Why Shibakawa Toshiyuki Now?

Mitsui Tomoyuki

Curator, Maniwa City Hiruzen Museum

What is the most important task I have accomplished in relation to this exhibition, SHIBAKAWA Toshiyuki : Hiruzen Museum of the 41st Century? I believe it was connecting the Museum of Hiruzen Area, Maniwa City with the artist at an early stage of the project, and I think Mr. Shibakawa would agree with me on this point.

The Maniwa City Hiruzen Museum (referred to below as "the Hiruzen Museum") differs from most art museums in many ways. Exhibiting artists are given a tour of the venue to explain these differences at an early stage, and in Mr. Shibakawa's case, we stopped by another museum, the Museum of Hiruzen Area, Maniwa City, on our way there. The primary goal was to introduce the artist to the director of the Museum of Hiruzen Area and greet the director, as he also heads the Hiruzen Museum. However, I also hoped that bringing an artist whose work incorporates elements of history and excavation, and whose work has been exhibited many times at museums of history, to meet the Museum of Hiruzen Area's director, a specialist in history, would lead to interesting connections and spark a chemical reaction of sorts.

As it turned out, I was right on the money. You might even say it was on that day that SHIBAKAWA Toshiyuki : Hiruzen Museum of the 41st Century first rumbled to life. At the time, the Museum of Hiruzen Area was presenting an exhibit called Panorama of the Hiruzenbara Army Training Ground : Protect, Preserve, Promise. It was a significant project based on careful research into the pre-World War II relationship between the Japanese military and Hiruzen, the breeding of war horses during the Taisho Era (1912-1926), and the massive army training grounds that were located there for approximately a decade until 1945. It seems that these military connections that existed only a century ago, of which there is no immediately visible trace in the present-day Hiruzen Highlands, were thematically linked in the artist's mind with the catastrophes of war and weapons of mass destruction, and that they resonated with the personal experiences that underlie his work.

Subsequently, there was a relatively smooth path to the decision, based on the artist's proposal, to utilize the entire venue as a museum of Hiruzen 2,000 years in the future, and to characterize each of the rooms where works are exhibited, including the lobby, as a "storage room" or an "excavation site." In collaboration with the Museum of Hiruzen Area, we were also able to borrow artillery shells used at the training ground, as well as precious artifacts from burial mounds. This made it possible

to present an exhibition that suggests not only the present and the future, but also a multilayered time continuum that contains the distant past. The war in Ukraine broke out just before the opening of the exhibition, and Shibakawa's new work fossilized tank inevitably appeared to be directly related to the actual war, resulting in an abrupt decision to change the character of its installation. However, there was a sense of a consistent narrative running through the project, and the opening day of the exhibition seemed to be linked to that first day we visited the Museum of Hiruzen Area.

Also, while the Museum of Hiruzen Area was initially conceived as a showcase for just a few works, the tie-up developed into Collaboration Project of Art and Archaeology - SHIBAKAWA Toshiyuki : Ancient Tomb Museum, Going Back and Forth Between "the Past" and "the Future," an exhibition utilizing the archaeological galleries. The show was even positioned as a commemorative event marking the 30th anniversary of the museum's opening, and eventually ran for a long time, all the way until December.

Now, let us return to the question of why Toshiyuki Shibakawa was chosen for what is in effect the first special exhibition at the Hiruzen Museum.

At a new facility that exhibits contemporary art, clearly many people expect to see young, up-and-coming artists. We have heard such comments, and such exhibitions may be one of the roles of the Hiruzen Museum. However, would that be appropriate for the first exhibition of contemporary art at the museum? In light of the question of why contemporary art is a good fit for an art venue that promotes harmonious coexistence with nature and fulfillment of SDGs (Sustainable Development Goals), the artist's age and acceptance within the closed circle of the art world are not likely to be criteria for selection. On the other hand, art that overtly makes virtuous claims regarding coexistence with nature and SDGs is unlikely to endure over the long term. Works that can appeal to a wide audience, which while at times provoking resistance have the power to affect how viewers perceive and think about the world, in other words their intellect, should be part of the cornerstone on which we build a truly symbiotic and sustainable society. It is not a bad idea then, to look to experienced artists who have built up long careers. Such an artist's experience would also be invaluable in installing the artworks to use the space with maximum effectiveness. After considering several other factors, including budget and preparation

time, we decided that Shibakawa Toshiyuki was the only choice for the exhibition, which led to the aforementioned visit to the Museum of Hiruzen Area.

Many have called his works "easily understandable," but I believe they would be more accurately described as "accessible." While many works of contemporary art leave the viewer puzzled as to what is going on, Shibakawa's works are certainly immediately recognizable to most adults as "present-day objects excavated in the future." This stimulates the intellect and curiosity of any viewer and invites various individual interpretations and imaginings, giving rich depth to the viewing experience in a manner that is similar to the appreciation of classical art.

The workshop he conducted using paint rollers can be thought of as an externalization of this mental experience of appreciation. Even if the instinct to apply colors to surfaces is a primal one, curiosity is aroused by the forms that appear unexpectedly, and the need to interpret the forms that emerge sparks the intellect.

Meanwhile, Shibakawa's works are coated with paints prepared by hand, reapplied and dried 20 times (each time representing a century) and then partially scraped off to give a visceral sense of the passage of 2,000 years. It is possible to view his work as a kind of abstract painting, with a powerful sense of materiality, on the surfaces of ready-made objects. It is also interesting to note that he uses this abstract painting technique to create works that comment incisively on our actual society.

Two thousand years is an unforgiving length of time. The values prevalent when objects were made become irrelevant, and the things unearthed as artifacts two millennia hence are not only things people wanted to preserve, but also things that embarrass people or show them in an unflattering light. This is a kind of critique of "harmonious coexistence with nature" and "sustainable development" as phrases frequently bandied out by those seeking to appear virtuous, and in that sense it was an appropriate choice for the museum's first contemporary art exhibition.

Let us also consider the exhibition at the Museum of Hiruzen Area. Unlike the one at the Hiruzen Museum, which is organized according to the artist's instructions, the Museum of Hiruzen Area features works integrated into the archaeological exhibits already on view there. The absoluteness of the present is disrupted by an intermittently appearing gaze from the future to the present

lurking behind our gaze that views ancient times from the present day, and as the title states, the exhibition does indeed "go back and forth between the past and the future." According to the artist, a situation where archaeological artifacts and contemporary objects are unearthed together is one that could occur if a museum were excavated by archaeologists of the future, and the exhibit hinted at an ironic situation in which such a museum could inadvertently confuse said archaeologists.

Selection and arrangement of works was carried out not only by the artist but also by the museum's director, and the works were related in terms of meaning and form: an automotive logo next to a relic of equestrian gear, a (fossilized) cup of instant noodles on a shelf of earthenware used for cooking, and so on. At first glance these interventions looked like a prank reminiscent of actions by Banksy, but many visitors seemed to see them as humorous and playful, and I believe that the accessibility of the works may have led people to contemplate history more deeply.

As the museum's first exhibition of contemporary art, it ended up being more fulfilling than we could have dared to hope, in terms of both content and external collaboration. This was thanks to the cooperation of the Museum of Hiruzen Area, which generously showed their understanding even before the exhibition was realized; the many schools we partnered with; and above all the efforts of Shibakawa Toshiyuki. Indeed, while the task I carried out was a small one, I am overjoyed that I was able to contribute to this exhibition.

トピックス | Topics

柴川敏之展に関連する土地や施設、見学会について紹介します。

岡山県真庭市

2005年、岡山県北部の9町村が合併して誕生した真庭市は、中国山地のほぼ中央にあり、蒜山高原、湯原温泉、勝山の町並みをはじめ、風情ある景観や文化が各地で守り育てられている。また、バイオマス発電など、持続可能な循環型のまちを目指した取り組みでも知られる。



真庭市 蒜山ミュージアム

人と自然の共生が体感できる文化・芸術をテーマとする真庭市蒜山ミュージアムは、建築家・隈研吾設計による観光文化発信拠点【GREENable HIRUZEN】内の施設。建物は東京から移築されたものだが、使われている注目の集成材CLT（直交集成板）は、真庭産の木材を真庭で加工したものである。

所蔵作品は持たず、隈研吾の建築資料と、現在活躍中のアーティストによる現代美術を展示の核として、地域や教育などと連携した活動を展開している。



©Kawasumi-Kobayashi Kenji Photograph Office

隈研吾建築資料展示



©Kawasumi-Kobayashi Kenji Photograph Office

蒜山ミュージアムではオープン第1回・2回目の展覧会として隈研吾展を開催。その後も一部の展示室で、隈研吾建築都市設計事務所より寄託された模型など建築資料の展示を行っている。

柴川敏之展の会期中は、地形と建築の関係に注目した「沿うかたち」を開催した。



およそ百万年前の火山活動でできた蒜山三座（上蒜山・中蒜山・下蒜山）。その裾野に広がる標高500～600メートルの蒜山高原は、その後大山などの火山活動により生じた湖が干上がりってきた高原である。現在はキャンプ場や遊園地、スキー場などがあり、山裾の草原で放牧されるジャージー牛の乳製品など豊かな食も楽しめるリゾート地として知られる。また、豊かな草地を守るために春の「山焼き」やユネスコ無形文化遺産に登録された盆踊り「大宮踊」など自然とともにあら伝統文化の守り伝えられる地もある。



真庭市 蒜山郷土博物館

真庭市蒜山地域の歴史と文化をわかりやすく紹介する施設として開館し、2022年、30周年を迎えた。隣接する国史跡四ツ塚古墳群の出土遺物や、ユネスコ無形文化遺産である大宮踊等、地域の特徴を詳しく紹介している。ロビーからは蒜山三座の大展望が広がり、一帯は史跡公園となっている。



四ツ塚古墳群は国史跡であり、合計16基の古墳が現存する。かつては40基以上残っていたと言われる。いずれも6世紀代の円墳で、とくに1・4号墳が大きいことから「四ツ塚」と呼ばれている。1号墳は石室を持つ。金銅製や鉄製の装飾馬具や赤色顔料が塗布された埴輪が特徴で、山陰地方の勢力下にあったことを推定させる。一帯は史跡公園となっており、四季折々の花々や樹木が美しい。



企画展「蒜山原陸軍演習場の全貌～守り、伝え、誓う」

会期：2021年4月24日（土）～11月23日（火・祝） 会場：真庭市蒜山郷土博物館

1935～45年にかけて蒜山地域に設置された蒜山原陸軍演習場の全貌を示した初の展示会で、関連する文献や遺物を数多く展示した。2021年4月に開会し、好評につき会期を大幅延長して11月まで開催した。蒜山の演習場は、設置当時、日本一の規模を有する施設だった。西日本を中心とする各地の連隊が、軍事演習のために、絶えず訪問した。広大な草原を利用し、行軍だけでなく、砲弾や銃器の実弾射撃、集団模擬戦争、重爆撃機爆弾投下、毒ガス弾実験などが頻繁に行われた。戦争末期には、手榴弾を持って戦車に飛びこむ特攻訓練さえ行われた。敗戦後、演習場は廃止され、おおむね開拓耕地となる。しかし、演習場時代の砲弾や銃弾が発見されることも多かった。また、トーチカ陣地や兵舎など当時の軍事施設も現存し、戦争遺跡群としても貴重である。近年は、平和学習のための重要史跡として、戦争遺跡群を再認識し、保全しようという動きが進んでいる。



蒜山地域を進む騎兵と野砲（真庭市蒜山郷土博物館提供）



蒜山三座への実弾射撃訓練（真庭市蒜山郷土博物館提供）

関連イベント | Related Events

柴川敏之ワークショップ*

- 講師：柴川敏之（現代美術家、就実短期大学教授）
- 内容：身近なモノを並べ、その上に白い帆布を被せた状態を「2000年後の土」に、黒インクのついたローラーを「スコップ」に見立てて、発掘体験をしました。ローラーを転がすと、次々と身近なモノが化石のように現れました。全体の構成は、「真庭や蒜山の街並みの地図」になっています。

① 2000年後のまにわを発掘しよう！

- 日時：2022年5月22日（日）13:30 - 16:00
- 場所：真庭市蒜山ミュージアム
- 対象：満5歳（年長）から大人まで
- 参加：16名



② 2000年後の落合小学校を発掘しよう！

- 日時：2022年5月23日（月）13:55 - 15:30
- 場所：真庭市立落合小学校
- 対象：真庭市立落合小学校 2年生
- 参加：27名



③ 2000年後のひるぜんを発掘しよう！

- 日時：2022年5月27日（金）10:45 - 12:00
- 場所：蒜山郷土博物館
- 対象：真庭市立八束小学校 6年生
- 参加：20名



④ 2000年後のひるぜんを発掘しよう！

- 日時：2022年5月28日（土）9:00 - 12:00 の随時（1回／約10分間）
- 場所：蒜山郷土博物館
- 対象：幼児から大人まで
- 参加：7名

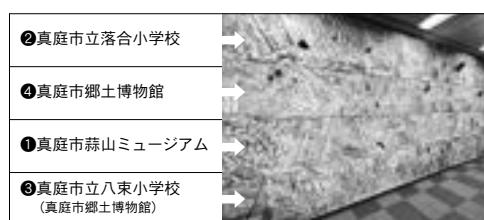


ワークショップ作品の構成

帆布の下には柴川敏之が、身近なモノ、この地域で使われていたモノ、小学校で使うモノなどを使って、真庭市全体や蒜山地域の地図になるように並べました。さらに蚊取り線香を火山の噴火に、フラー鉄を洪水に見立て、この地域にイタリアのポンペイのような自然災害や戦争などの人為的災害が起こっている様子をイメージして構成しています。



作品の配置図



アーティストトーク 柴川敏之

- 日時：2022年3月21日（月・祝）14:00～（40分程度）
- 場所：真庭市蒜山ミュージアム

学芸員によるギャラリートーク（説明会）

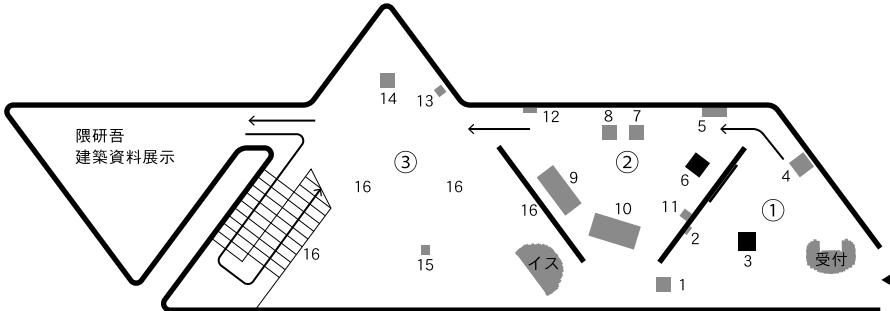
- 日時：2022年4月16日（土）14:00～／6月5日（日）11:00～（各回30分程度）
- 場所：真庭市蒜山ミュージアム



展示配置図・作品リスト (真庭市蒜山ミュージアム)

Exhibition Map • List of Works (Maniwa City Hiruzen Museum)

1F



① PLANET HIRUZEN | 2000年後に発掘された蒜山

- 1 《2000年後に発掘された「折り鶴」の化石》 2022, ミクストメディア
- 2 《2000年後に発掘された「スキー」の化石》 2022, ミクストメディア
- 3 《砲弾》 真庭市蒜山郷土博物館蔵
- 4 《2000年後に発掘された「牛と戦車＆コントローラー」の化石》 2022, ミクストメディア

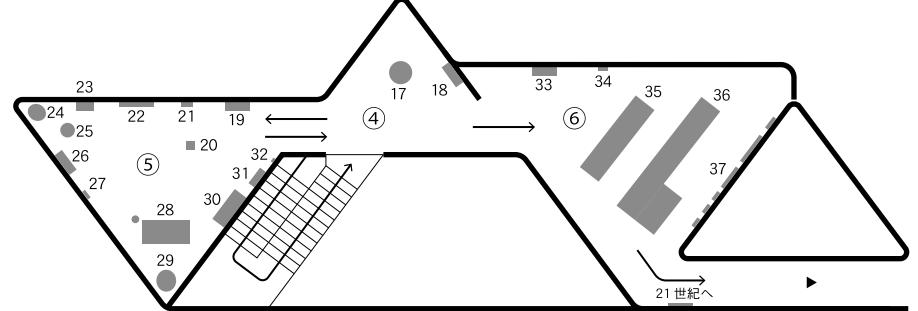
② PLANET LABORATORY | 2000年後に発掘された蒜山の研究室

- 5 《2000年後に発掘された「ソフトクリーム」の化石》 2022, ミクストメディア
- 6 《装飾馬具（面懸金具、雲珠、杏葉）》 真庭市蒜山郷土博物館蔵
- 7 《2000年後に発掘された「蒜山焼きそば」の化石》 2022, ミクストメディア
- 8 《2000年後に発掘された「牛乳＆ヨーグルト」の化石》 2022, ミクストメディア
- 9 《2000年後の考古学者の机1（蒜山の出土品を分類整理中／柴川敏之アトリエの机）》 2022, ミクストメディア
- 10 《2000年後の考古学者の机2（蒜山の街を復元中）》 2022, ミクストメディア
- 11 《2000年後に発掘された「メリーゴーランド」の化石》 2022, ミクストメディア
- 12 《2000年後に発掘された「スキーのストック（忘れ物）」の化石》 2022, ミクストメディア

③ PLANET EXCAVATION SITE | 2000年後の発掘現場～キューピーを探せ！

- 13 《2000年後に発掘された「キューピー人形（小）」の化石》 2002, ミクストメディア
- 14 《2000年後に発掘された「キューピー人形（特大）」の化石》 2005, ミクストメディア
- 15 《2000年後に発掘された「地球儀」の化石》 2022, ミクストメディア
- 16 《2000年後に発掘された「キューピー人形など」の化石》 2005～2022, ミクストメディア

2F



④ PLANET CARE | 2000年後に発掘された介護

- 17 《2000年後に発掘された「車椅子」の化石》 2018, ミクストメディア
- 18 《2000年後に発掘された「尿瓶＆吸い飲み」の化石》 2018, ミクストメディア

⑤ PLANET HOME – CHILDCARE | 2000年後に発掘された家～育児

- 19 《2000年後に発掘された「柴川家の玄関（コロナ禍の柴川家へようこそ！）」の化石》 2022, ミクストメディア
- 20 《2000年後に発掘された「キューピー人形（マスクを付けた息子7才）」の化石》 2022, ミクストメディア
- 21 《2000年後に発掘された「能面（マスクを外したおくさん）」の化石》 2022, ミクストメディア
- 22 《2000年後に発掘された「抱っこ紐、ランドセル、赤白帽子、ネクタイ」の化石》 2018, ミクストメディア
- 23 《2000年後に発掘された「洗面所」の化石》 2022, ミクストメディア
- 24 《2000年後に発掘された「風呂場（遊ぶ娘0才10ヶ月）」の化石》 2022, ミクストメディア
- 25 《2000年後に発掘された「洗濯物」の化石》 2018, ミクストメディア
- 26 《2000年後に発掘された「おもちゃ棚＆ズボン（ぼくを真似した息子の抜け殻）」の化石》 2022, ミクストメディア
- 27 《2000年後に発掘された「時計（小学校登校に向けて、遅刻ギリギリ時刻）」の化石》 2018, ミクストメディア
- 28 《2000年後に発掘された「食卓（ここでパソコンしないで！）」の化石》 2022, ミクストメディア
- 29 《2000年後に発掘された「寝室（掃除するから早くぞいで！）」の化石》 2022, ミクストメディア
- 30 《2000年後に発掘された「流し台」の化石》 2018, ミクストメディア
- 31 《2000年後に発掘された「棚（ぼくとおくさんの愛用品）」の化石》 2022, ミクストメディア
- 32 《2000年後に発掘された「鬼面（これからマスクを付けるおくさん）」の化石》 2022, ミクストメディア

⑥ PLANET STORAGE | 2000年後の収蔵庫

- 33 《2000年後に発掘された「アクセサリー掛け（GREENable HIRUZENロゴマークの見立て）」の化石》 2022, ミクストメディア
- 34 《2000年後に発掘された「カンヴァス（サムホールサイズ）」の化石》 2022, ミクストメディア
- 35 《2000年後に発掘された化石群1（整理中の出土品）》 2002～2022, ミクストメディア
- 36 《2000年後に発掘された化石群2（整理済みの出土品）》 2002～2022, ミクストメディア
- 37 《2000年後に発掘された絵画の化石群（モネ、セザンヌ、ルノワール、ムンク、ゴッホ、ピカソ他）》 2004～2022, ミクストメディア

柴川敏之 略歴 | Profile : SHIBAKAWA Toshiyuki

1966 アルベルト・ジャコメッティの命日（1966.1.11）に大阪府で生まれる。

1991 広島大学大学院修了

1993 草戸千軒町遺跡（広島県福山市）と出会い、「2000 年後に発掘された現代社会」をテーマに制作を開始

1997 文部省在外研究員としてイタリアに在住し、フレスコ画やポンペイ遺跡等を調査研究（ミラノ国立ブレラ美術学校）

現在、岡山市在住。就実短期大学教授、広島大学客員教授

<https://www.toshiyuki-shibakawa.com>

主な個展・プロジェクト

2022 柴川敏之展 | 41 世紀の蒜山博物館／真庭市蒜山ミュージアム（岡山）

柴川敏之展 | 41 世紀の古墳ミュージアム／真庭市蒜山郷土博物館（岡山）

アートな仕事ーク vol.8 アート×家庭、2000 年後を想像する／金沢市民芸術村（石川）

2020 未来からの扉～2000 年後のやきもの王国へようこそ！／高浜市やきものの里かわら美術館（愛知）

2018 ばくのおくさん☆柴川敏之展 | PLANET HOME／つなぎ美術館（熊本）

2017 2000 年後の倉敷☆発掘ミュージアム／倉敷埋蔵文化財センター（岡山）

2015 柴川敏之展 | 2000 年後の美術館／Taipei World Trade Center（台湾）[ART TAIPEI 2015 Public Program]

2014 PLANET PYRAMID：柴川敏之展 | 2000 年後のピラミッド／九州芸文館（福岡）[ちくごアートファーム計画]

2013 PLANET TACTILE：柴川敏之 | 2000 年後の今に触れる☆プロジェクト／川崎市市民ミュージアム（神奈川）

PLANET SCHOOL：柴川敏之×てんとうむしプロジェクト | 2000 年後の小学校／京都芸術センター（京都）

2012 PLANET SCROLL：柴川敏之展 | 2000 年後の化石絵巻／秋吉台国際芸術村（山口）

2010 大原美術館の 80 歳をお祝いしよう！プロジェクト／大原美術館（岡山）

PLANET ANTIQUES：柴川敏之展 | 2000 年後の骨董市／YOD Gallery（大阪）

2009 PLANET WALL：柴川敏之展/a piece of space APS（東京）

2008 柴川敏之 | 2000 年後の未来遺跡 | 三内まるごとミュージアム | PLANET SANNAI／青森県立美術館、三内丸山遺跡（青森）[アートイン三内丸山遺跡プロジェクト]

PLANET MUSEUM ☆ PROJECT: 柴川敏之 | 2000 年後の美術館☆プロジェクト／高知県立美術館、他 17 施設（高知）[美術館のなつやすみ・スペシャル]

2007 TRAVELER：縄文土器と美術家 柴川敏之の世界／京都造形芸術大学芸術館（京都）

PLANET CAPSULE：柴川敏之 | 2000 年後のタイムカプセル／鶴岡アートフォーラム（山形）

2006 PLANET STREET: 柴川敏之 | 2000 年後に発掘された《駅～まち～美術館》／佐倉市立美術館、栄町、京成佐倉駅（千葉）

時のかけら：柴川敏之展 | 2000 年後のミュージアム～縄文と現代の行方／辰野美術館（長野）

PLANET DRAGON：龍の道：2000 年後の龍の行方／千光寺道、尾道市商店街、尾道市内小学校他（広島）

PLANET PIECES：柴川敏之展/a piece of space APS、巷房階段下他（東京）

2005 未来美術館へ行こう！柴川敏之展：PLANET MUSEUM OF ART/TWO ROOMS／奈義町現代美術館（岡山）

2004 アート・ネットワーク 柴川敏之展：PLANET MUSEUM OF ART/ONE ROOM／ふくやま美術館（広島）

2003 2000 年後の冒険ミュージアム “川に埋もれた伝説の町～草戸千軒” と “現代の美術” 展／広島県立歴史博物館（広島）

2001 公募・今日の作家シリーズ PLANET CIRCLE：柴川敏之展／大阪府立現代美術センター（大阪）

1999 PLANET GARDEN：柴川敏之展 | 惑星の箱庭／しぶや美術館（広島）

美術の時間 vol.6 柴川敏之展 | 41 世紀からのメッセージ／まつもとコーポレーション デビットホール（岡山）

主なグループ展

2023 ZSONAMACO 2023 / Centro Citibanamex（メキシコ）

2022 丹波篠山・まちなみアートフェスティバル 2022 / 丹波古陶館（兵庫）

美作三湯 芸術温度／湯郷温泉からざ（岡山）（同：2016、2019）

VOLTA BASEL 2022 / ELSÄSSERSTRASSE 215（スイス）（同：2018、2019）

ART TAIPEI 2022 / Taipei World Trade Center（台湾）（同：2014～2021）

MODERN AND CONTEMPORARY ART FESTIVAL / Fairmont Makati（フィリピン）

2022 ART OSAKA 2022 / 大阪市中央公会堂（大阪）（同：2021, ホテルグランヴィア大阪：2010～2019）

KUNST RAI ART AMSTERDAM 2022 / Amstelhal Amsterdam RAI（オランダ）（同：2019）

なんでそんなんエキスポ VOL.2 高知巡回展／豪工ミュージアム（高知）

2021 Happy Together / Pavillon Carré de Baudouin（フランス）

2019 ART021 / Shanghai Exhibition Center（上海）

未來考古學（科技篇） | 柴川敏之・塗維政／Der-Horng Art Gallery（台湾）

Art Central Hong Kong / Central Harborfront（香港）

2018 なつやすみの美術館 8 タイムトラベル／和歌山県立近代美術館（和歌山）

Affordable Art Fair Singapore 2018 / F1 Pit Building（シンガポール）

2017 神戸からの時空～アートの旅人たち／BB ブラザ美術館（兵庫）

2016 広島芸術学会第 10 回芸術展示 不在の存在論／広島県立美術館、ギャラリー G（広島）

岡崎和郎×柴川敏之 | 未来の化石・化石の未来／倉敷市立美術館（岡山）[発掘された過去・現在・未来]

Bazaar Art Jakarta 2016 / The Ritz-Carlton, Pacific Place（インドネシア）

2015 ABOUT ART EXPO MALAYSIA PLUS / MECC（マレーシア）

アート・オブ・メモリー 記憶をめぐる 4 つのレシピ／北九州市立美術館（福岡）

2014 NEW CITY ART FAIR / hpgrp GALLERY NEW YORK（アメリカ）（同：2012）

Affordable Art Fair Brussels / Tour & Taxis（ベルギー）

Collection Gilles Balmet / ÉSAD de Grenoble（フランス）

2013 岡部昌生・柴川敏之展～未来の考古学／ギャラリーてんぐスクエア（広島）[アート・アーチ・ひろしま 2013]

ようこそ炳へ！遊ぼうよバラダイス／炳の津ミュージアム（広島）

2012 始発電車を待ちながら 東京駅と鉄道をめぐる現代アート 9 つの物語／東京ステーションギャラリー（東京）

岡山芸術回廊 特別展「つながるけしき」／岡山後楽園（岡山）

2011 夏休み・みんなで楽しむ展覧会『いつの人？どこの人？どんな人？』／大阪市立近代美術館（仮称）心斎橋展示室（大阪）

2010 ART GWANGJU 2010 / KDJ Convention Center（韓国）

2009 SUMO_AURA（相撲オーラ展）／十和田市現代美術館（青森）

2007 おもちゃの今～未来展 藤浩志と柴川敏之／篠山チルドレンズミュージアム、歴史美術館、丹波古陶館他（兵庫）

2006 TAMA VIVANT 2006 「今、リズムが重なる」／多摩美術大学（東京）、みなとみらい駅（神奈川）

Art in 福寿会館／福寿会館（広島）[ふくやま美術館企画]

印象派から広がる美術の世界／浜田市世界こども美術館（島根）

さわって楽しむ現代美術展／浜田市世界こども美術館（島根）

現代の造形～Life & Art～ 酔いかたち／東広島市立美術館（広島）

2005 ARTOM60 現代美術展 被爆 60 年に向けて／旧日本銀行広島支店（広島）

現代美術の展望「VOCA 展 2005～新しい平面の作家たち～」／上野の森美術館（東京）

2002 ヒロシマアートドキュメント 2002 / 旧日本銀行広島支店（広島）

2000 龍の國・尾道～その象徴と造形／尾道市立美術館（広島）

主なワークショップ

2020 2000 年後のやきもの王国を発掘しよう！／高浜市やきものの里かわら美術館（愛知）

未来を占おう！2000 年後のおみくじ☆プロジェクト @ 岡山神社／岡山神社（岡山）

2000 年後の御南こども園を発掘しよう！／御南認定こども園（岡山）

2018 六本木アートナイト 2018 | 柴川敏之 | 2000 年後の六本木プロジェクト／三河台公園（東京）

2000 年後の和歌山を発掘しよう！／和歌山県立近代美術館（和歌山）

2017 アート入門：ようこそ！2000 年後の世界へ／BB ブラザ美術館（兵庫）

高校生講座「2000 年後の化石を発掘しよう！」、あそ美じゅつ「2000 年後の絵手紙をつくろう！」／松本市美術館（長野）[彫刻家・細川宗英展 人間存在の美]

- 2016 2000年後のブリッジ☆プロジェクト／リバーウォーク北九州、小倉井筒屋他（福岡）【北九州市立美術館アウトリーチ事業】
- 2014 2000年後へタイムスリップ!?「いま」のモノを化石にしよう！／北九州市立美術館（福岡）
- 2013 2000年後の今を発掘しよう！／川崎市市民ミュージアム、川崎市立田島養護学校（神奈川）
- 2000年後のひろしまを発掘しよう！／広島県立美術館（広島）【アート・アーチ・ひろしま 2013】
- 2012 電車に乗ってタイムスリップ!? 2000年後の紙の化石を作ろう！／青梅鉄道公園（東京）【東京ステーションギャラリー企画】
- 2010 2000年後の化石を作ろう！／John Muir School（アメリカ）
- 2009 2000年後の音の化石／東京都荒川区立尾久宮前小学校（東京）
- 2008 2000年後の壁画をつくろう☆ピカソに挑戦！／吳市立美術館（広島）【ピカソ展】
- 2007 2000年後の美術館をつくろう！／七つ梅酒造跡（埼玉）【深谷オンセンプロジェクト 2007「ふかやであそぼ！」】
子どもと造形 2000年後の部屋／伊丹市立美術館（兵庫）
- 2000年後のスティンドグラスをつくろう！子どもたちと丹下健三の建築と柴川敏之のコラボレーション／倉敷市立美術館（岡山）
- 2006 2000年後の大蛇（おろち）をつくろう！／浜田市世界こども美術館（島根）【こども美術館まつり 2006】
- 2005 2000年後の学校を紙にうつそう！／東京都北区西ヶ原小学校（東京）【ニシガハラズコウスクール チャレンジプログラム】
2000年後の風景をつくろう !!／丸亀市猪熊弦一郎現代美術館（香川）【風景遊歩 sight-cruising】
- 2003 現代を版画にしよう！ミロに挑戦／成羽町美術館（岡山）【版画の魅力 7人の巨匠展～ゴヤからミロまで】
現代を版画にしよう！棟方志功に挑戦／ひろしま美術館（広島）【生誕 100 年記念 棟方志功展】

その他

- 2022 シンポジウム「アートな仕事一課 vol.8 アート×家庭、2000年後を想像する」／金沢市民芸術村（石川）
- 2021 シンポジウム・審査員「第1回なんでそんなん大賞」／HYM hostel（岡山）
- 2018 トークセッション「アートで迫る夫婦新悲喜劇！」／つなぎ美術館（熊本）
ESD カフェ「未来の HOME ~暮らし・コミュニティ・地球~ を語る」／つなぎ美術館（熊本）
- 2014 クロストーク「ちくごアートファーム計画～筑後の風土と芸術文化～ | 八女の古墳群と芸術文化」／九州芸文館（福岡）
- 2013 明倫茶会「2000年後の発掘☆茶会」／京都芸術センター（京都）
- 2012 中学校美術科教科書『美術 I | 美術との出会い』に作品掲載／日本文教出版株式会社
- 2011 講演「2000年後のアートプロジェクト」／Southern Oregon University（アメリカ）
- 2009 講演「2000年後の美術館・博物館プロジェクト」／北海道大学総合博物館（北海道）
- 2008 シンポジウム「2000年後のまちの行方～地域文化を活かしたアートプロジェクト～」／辰野美術館（長野）
- 2006 講演「2000年後に発掘された現代の遺跡」／多摩美術大学（東京）
映画『ちゃんこ』：脚本・美術協力、題字デザイン、出演他／カンヌ映画祭、ベルリン映画祭他 制作：ドリームワン







柴川敏之展 41世紀の蒜山博物館

-高原のミュージアムを後にすると、そこは21世紀だった。

記録集

編集：柴川敏之、三井知行

執筆：柴川敏之、前原茂雄、川延安直、三井知行

翻訳：クリストファー・スティヴィンズ、小島康子

デザイン：ブルーワークス PHOTO & DESIGN Office

写真：青地大輔 ※一部の写真を除く

印刷：株式会社 iプランニング KOHWA

発行日：2023年3月31日

発行：真庭市

お問合せ：

真庭市生活環境部スポーツ・文化振興課

Tel.0867-42-1178 / Fax.0867-42-1416

sportsbunka@city.maniwa.lg.jp

不許複製・禁無断転載





真庭市蒜山ミュージアム Maniwa City Hiruzen Museum

